

史跡 齋宮跡

令和元年度発掘調査概報

2021年3月

齋宮歴史博物館



第 197 次調査区全景（南西から）



飛鳥時代の重複する四脚門（北西から）

序

令和2年は、昭和45年に始まった齋宮跡の発掘調査が50年を迎え、史跡齋宮跡にとって節目の年になりました。50年間発掘調査を絶え間なく続けることができましたのも、地域の皆様のご理解・ご協力があったからこそと改めて感謝いたします。

さて、今回報告する第197次発掘調査は、齋宮の成立にかかる実態を解明するため、史跡西部の中垣内地区で行ったものです。調査の結果、従来から大きな課題とされていた、飛鳥時代後期の掘立柱塀による区画内の構造の把握について大きな成果をあげる事ができました。これは今後、飛鳥時代の齋宮を考えるため、また、周囲の発掘調査方針を考えるための大きな成果とも言えます。この調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

今後も齋宮歴史博物館は、全国で唯一無二の遺跡である齋宮跡を体感できるサイトミュージアムとして、いっそう魅力ある活動を続けてまいります。

史跡齋宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、齋宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2021（令和3）年3月

齋宮歴史博物館
館長 上村 一 弥

例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が令和元年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第197次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第196次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第VI座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器分類と年代観については、一部を除き以下の文献に拠った。
・斎宮歴史博物館2018「斎宮跡の土器編年の再検討」『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』
- 5 斎宮跡の時期区分については土器編年に基づき、期と段階を用いて「斎宮跡Ⅱ期第1段階」等と表記するが、本文中ではこれを簡略的に「斎宮Ⅱ-1期」と表現している。
- 6 遺構表示記号は、文化庁文化財部記念物課2010『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-』に準拠し、遺構の種類から次のように表記している。
SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物・門 SI：堅穴建物 SD：溝 SK：土坑 SZ：周溝墓
- 7 遺物実測図は基本的に実物の4分の1で行っている。遺物写真は縮尺不同である。
- 8 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第5版（1989年）を用いて補っている。
- 9 遺物の漢字表現は、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いる。ただし、参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。
- 10 発掘調査にあたっては、以下の方々のご指導、ご協力を賜った。
篠原祐一・田村陽一・箱崎和久・林部 均（五十音順 敬称略）
- 11 本書の執筆は山中由紀子が、遺物写真の撮影は大川勝宏があたり、編集は調査研究課で行った。また、発掘調査は山中が担当し、現地調査及び資料整理については、大川・川部浩司・宮原佑治・八木光代・森本周子・中西宏美が補佐した。

目次

I 前言	1
II 第197次調査	7

挿図目次

第I-1図 史跡斎宮跡位置図	4
第I-2図 令和元年度発掘調査位置図	5
第I-3図 史跡斎宮跡における大地区表示図	6
第II-1図 第197次調査 グリッド図	8
第II-2図 第197次調査 遺構平面図	8
第II-3図 第197次調査 調査区土層断面図	9
第II-4図 第197次調査と既往調査遺構平面図	10
第II-5図 第197次調査 弥生時代遺構分布図	11
第II-6図 S Z 11303 土器出土状況平面・立面図	12
第II-7図 S K 11326 土器出土状況平面・立面図	12
第II-8図 S K 11329 見通し断面図	12
第II-9図 第197次調査 古墳時代遺構分布図	13
第II-10図 S A 11310 平面・土層断面図	14
第II-11図 S B 11320・11330 平面・土層断面図	15
第II-12図 S B 11110 平面・土層断面図	16
第II-13図 S B 11339・11340 平面・土層断面図	17
第II-14図 S D 11106・11107・11323・11324 平面・土層断面図	18
第II-15図 「白色粘土」確認箇所土層断面図	20
第II-16図 調査区南東部の掘立柱塀群 平面・土層断面図	21
第II-17図 S B 11342・11345 平面・土層断面図	22
第II-18図 S D 11337・S K 11331、S D 11101 平面・土層断面図	23
第II-19図 第197次調査 出土遺物実測図1<遺構>	27
第II-20図 第197次調査 出土遺物実測図2<遺構>	28
第II-21図 第197次調査 出土遺物実測図3<包含層>	30
第II-22図 第197次調査 出土遺物実測図4<包含層その他>	31
第II-23図 飛鳥時代の遺構変遷図	35

表 目 次

第Ⅰ－１表	令和元年度史跡齋宮跡の現状変更等許可申請一覧	3
第Ⅰ－２表	令和元年度発掘調査一覧	3
第Ⅱ－１表	第197次調査 遺構一覧1	24
第Ⅱ－２表	第197次調査 遺構一覧2	25
第Ⅱ－３表	第197次調査 掘立柱塀・門・掘立柱建物一覧	25
第Ⅱ－４表	第197次調査 遺物観察表1	36
第Ⅱ－５表	第197次調査 遺物観察表2	37
第Ⅱ－６表	第197次調査 遺物観察表3	38

写 真 図 版 目 次

巻頭図版	第197次調査区全景／飛鳥時代の重複する四脚門	
写真図版1	調査区遠景／調査区全景	39
写真図版2	S A 11310／S B 11110 柱穴2 柱抜取穴検出状況	40
写真図版3	S D 11107／S D 11107 柱穴2 断面／S D 11323／S D 11323 断面／ S D 11297・S B 11320 柱穴断面／調査区南東部 奈良時代掘立柱塀群	41
写真図版4	第197次調査 出土遺物	42

I 前 言

1 調査の経緯と概要

史跡齋宮跡にかかる経緯と経過

齋宮跡の発見の契機は、高度経済成長期に齋宮段丘面の西縁部で大規模な宅地造成計画が立てられ、その開発事業に先立って実施された昭和45年の古里遺跡の確認調査による。大型の建物を含む多くの掘立柱建物、井戸、土坑、奈良時代と鎌倉時代の大溝、蹄脚硯や大型赤彩土馬、緑釉陶器などが発見され、齋宮関連の重要遺跡と認識された。昭和48年度から文化庁の補助事業として確認調査を重ね、東西2km、南北700mに及ぶ137haの史跡範囲が把握されるに至り、昭和54年3月27日に国史跡に指定された。管理団体は明和町である。

三重県は、史跡指定に伴い齋宮跡調査事務所を設置して、平成元年度からは新たに開館した齋宮歴史博物館によって、主に史跡の内容確認のための計画的な学術調査を継続的に実施している。

これまでの発掘調査では、史跡東部に所在する方格街区（地割）と平安時代の齋宮中枢部について具体的な解明が進展した。平成27年度には柳原区画で平安時代前期の齋宮寮庁（正殿・西脇殿・東脇殿）を対象に、史跡整備の一環として復元建物を建設し、史跡公園「さいくう平安の杜」として公開活用している。

明和町では「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取り組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画に基づいて、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画し、平成24年度に発掘調査を行い、平成27年度から工事に着手、平成29年3月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。また、平成27年4月24日には「祈る皇女齋王のみやこ齋宮」が日本遺産に認定されている。

史跡齋宮跡の発掘調査

昭和45年の確認調査（第1次）を皮切りに、史跡内容確認の計画的な学術調査、現状変更等に伴う調

査が積み重ねられ、令和元年度の調査で49年目を迎えた。これまでは史跡東部の平安時代齋宮にかかる方格街区内部の発掘調査に重点を置き、具体的な構造の解明に取り組んできた。これらの成果を毎年、発掘調査概報としてまとめているが、齋王の宮殿「内院」、柳原区画の「齋宮寮庁」、下園東区画の「寮庫」については正式な発掘調査報告書を刊行している。今後は「飛鳥時代～奈良時代齋宮」等にかかる発掘調査報告書も順次刊行していく方針である。

齋宮歴史博物館は平成29年3月、史跡齋宮跡発掘調査の考え方や調査計画をまとめた『史跡齋宮跡発掘調査基本方針』を策定した。その中では、史跡内容確認の重点項目として、初現期（飛鳥～奈良時代）の齋宮の実態解明、方格街区内部構造の解明、衰退期（平安～鎌倉時代）の齋宮の実態解明、齋宮に関わる居住、生産・流通、墓域等の解明の4項目を課題に挙げた。そして当面の重点目標として、史跡西部での飛鳥～奈良時代齋宮中枢域の実態解明調査を掲げている。特に史跡西部の中でも中垣内地区は、古代伊勢道が北側にわずかに湾曲する部分を含み、古代伊勢道が敷設される以前の重要施設が集中していたと想定され、これまで飛鳥時代の掘立柱塀と想定される柱列1列を中心に、平面方位で北から東に約33°の傾きをもつ多数の建物跡を確認している。さらに奈良時代になると、平面方位を正方位へと変えた掘立柱塀による方形区画が確立しており、奈良時代齋宮の中枢施設も配置された重要地区である。

方針策定後の初年度となる平成29年度第192次調査では、台地平坦面の西端部に平成2年度第85～8次調査で確認されていた飛鳥時代の掘立柱塀となる1列の柱列が、方形区画として西側に配置されている可能性を想定して調査を行なった結果、当該期に関連する遺構が極めて希薄であることが明らかとなった。これを受けて平成30年度は、第193次調査において掘立柱塀による方形区画の北東角を確認し、区画内部に掘立柱塀と方向を同じくする掘立柱建物を確認、また第195次調査において方形区画の西側に複数回の建て替えを伴う総柱建物群を確認するこ

とができた。これらの成果を受けて令和元年度は、さらに区画内部の構造を明らかにすることを目的として第197次調査を実施した。調査期間は令和元年9月2日～令和2年3月23日、調査面積は425.8㎡であった。

発掘調査現場の公開活用

齋宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な公開活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や「子ども1日体験発掘教室」を開催している。

第197次調査の随時公開の見学者はのべ890名、特別展に伴う現場公開（令和元年11月3日）は53名、現地説明会（令和2年1月26日（日）10時30分～12時、13時～15時）は174名、子ども1日体験発掘教室（令和元年10月5・6日）は19名であった。

2 調査体制

史跡齋宮跡の調査研究・整備活用に関する業務は、齋宮歴史博物館調査研究課が担当した。当該報告に関わる組織は以下の体制で行った。

<第197次調査>

・令和元年度

大川勝宏（課長）

山中由紀子（主幹（課長代理））

川部浩司（主査）

宮原佑治（主任）

・令和2年度

大川勝宏（副参事兼課長）

山中由紀子（主幹兼課長代理）

川部浩司（主査）

宮原佑治（主任）

3 齋宮跡調査研究指導委員会

齋宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、令和2年1月10日に齋宮跡調査研究指導委員会を開催し、第197次調査の調査成果や明和町の整備事業について指導及び助言を得た。指導委員の方々は次のとおりである。

〔指導委員〕

浅野 聡（三重大学大学院准教授）

稲葉信子（筑波大学大学院教授）

小澤 毅（三重大学教授）

京楽真帆子（滋賀県立大学教授）

金田章裕（京都大学名誉教授）

黒田龍二（神戸大学大学院教授）

増渕 徹（京都橘大学教授）

松村恵司（奈良文化財研究所長）

本橋裕美（愛知県立大学准教授）

渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）

綿貫友子（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

4 令和元年度発掘調査一覧

文化財保護法第125条第1項の規定による史跡現状変更等許可申請は、令和元年度に41件（国許可22件、県許可19件）があった。このうち、当該許可申請の許可条件に基づく史跡齋宮跡の発掘調査及び立

会いを要した案件については、その内訳を第I-1表、発掘調査を実施した内容は第I-2表にまとめた。

明和町主体の第196次調査については、『史跡齋宮跡 令和元年度 現状変更緊急発掘調査報告』として、令和2年12月に明和町が刊行している。

現状変更等許可申請の内容	申請及び許可件数	対応別件数
個人・民間企業による申請	21	発掘調査 4、立会い 17
明和町による地域環境整備に伴う申請	1	立会い 1
明和町等による史跡環境整備及び維持管理に伴う申請	4	立会い 4
三重県による計画的発掘調査のための申請	1	発掘調査 1

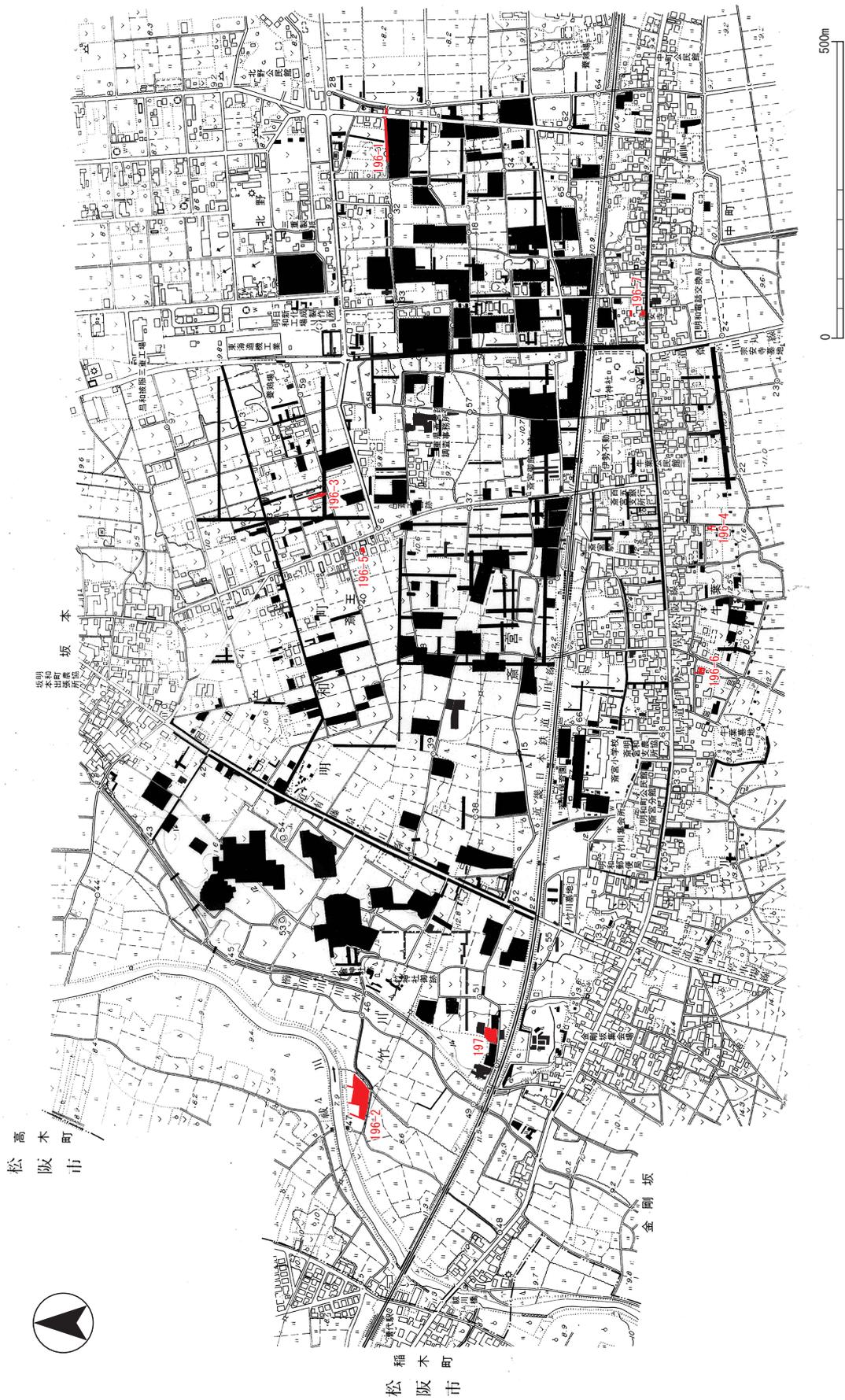
第I-1表 令和元年度史跡齋宮跡の現状変更等許可申請一覧

調査回数	地区	調査面積 (㎡)	調査期間	調査場所	現状変更申請者	現状変更申請理由	保存管理の土地利用区分
197	G10	425.8	R1.9.2~R2.3.23	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
196-1	U7, V7	328.0	H31.4.15~R1.7.17	明和町大字齋宮字東加座、東前沖	明和町	排水路改修	第一・二・三種保存地区
196-2	E7, F7, E8, F8	1330.0	R1.5.13~17・24 (確認調査) 7.22~11.14(本調査)	明和町大字竹川字祓戸	明和町	史跡整備	第三種保存地区
196-3	P7	105.5	R1.5.16~6.7	明和町大字齋宮字楽殿	個人	造成・盛土	第三種保存地区
196-4	O14	22.2	R1.8.19~21, 12.9	明和町大字齋宮字木葉山	個人	住宅改築	第四種保存地区
196-5	O8	103.3	R1.10.4~17	明和町大字齋宮字篠林	個人	住宅建築	第四種保存地区
196-6	N11	44.0	R1.11.13~26	明和町大字齋宮字木葉山	個人	住宅建築	第三種保存地区
196-7	S12	74.3	R1.11.28~12.17	明和町大字齋宮字中西	個人	住宅建築	第三種保存地区

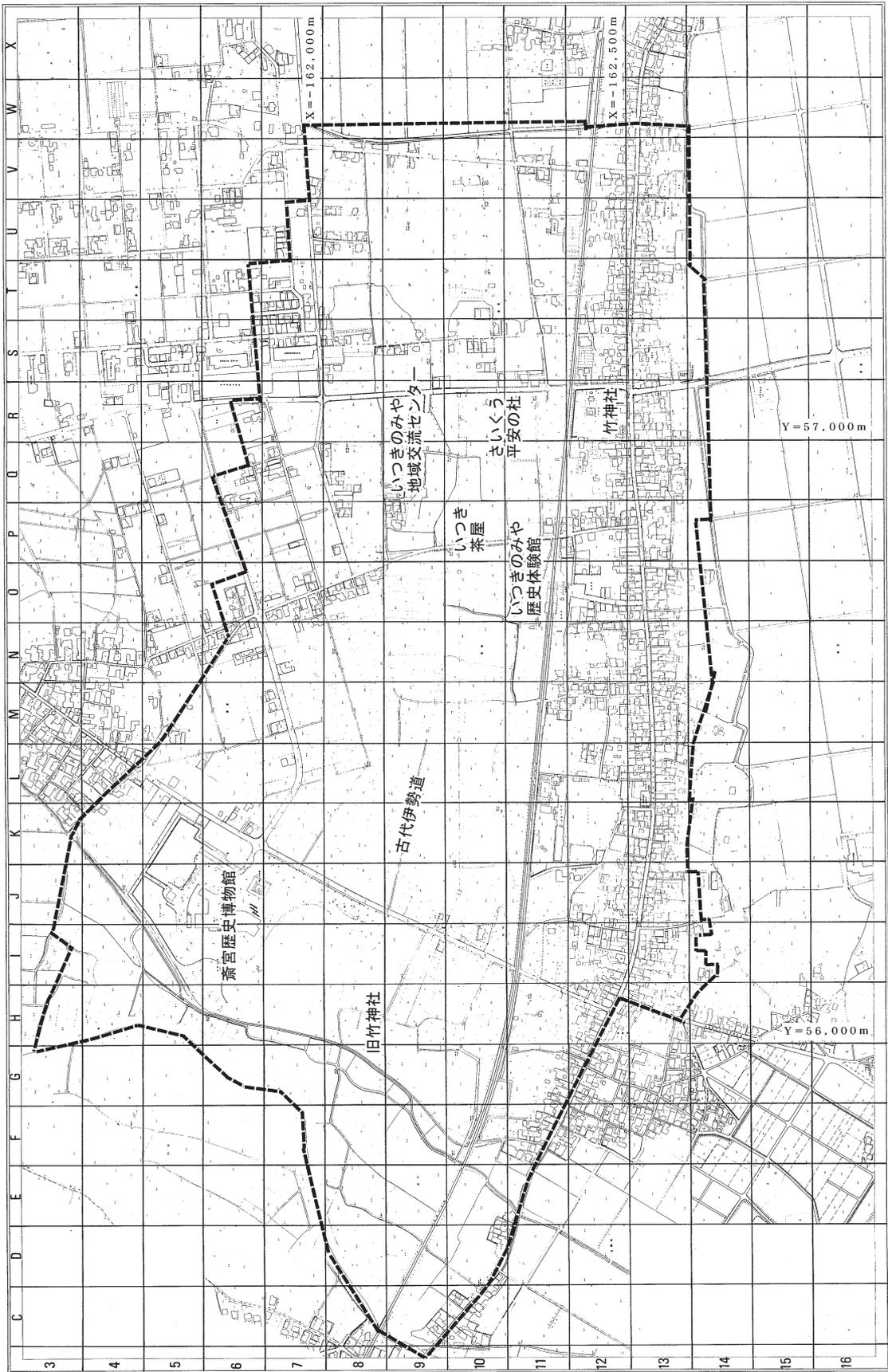
第I-2表 令和元年度発掘調査一覧



第 I - 1 図 史跡斎宮跡位置図 (1 : 500,000・国土地理院1/25,000「松阪」「明野」を改変)



第 I - 2 図 令和元年度発掘調査位置図 (1:10,000)



※太破線内が国史跡範囲、座標は日本測地形（旧国土座標第VI系）による。

第 I - 3 図 史跡齋宮跡における大地区表示図（2002年策定）

Ⅱ 第197次調査 (6AG10 中垣内地区)

1 はじめに

史跡西部の段丘縁辺には、古代伊勢道を基点として南北へ派生する道路沿いに飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・竪穴建物の分布が確認されている。特に古代伊勢道の南では、掘立柱塀で方形に区画された空間が複数箇所を確認され、これらは平安時代に方格街区が敷設される以前の齋宮中枢域と想定している。

飛鳥時代は、古代伊勢道から南へ派生する直線道路の敷設軸に合わせた方位の掘立柱塀による方形区画が確認されている。第193次調査で方形区画の北東角が確認され、第189次調査までの延伸部分を東辺、第85-8次調査で確認した掘立柱塀をその西辺とした方形区画の配置が明らかとなった。方形区画はN33°Eの方位をとり、東西幅約41m、南北幅55m以上の規模をもつ。区画内部は第193次調査で確認された長舎を含む掘立柱建物群が整然と配置されているものと予想される。また、方形区画の西側、段丘縁には第195次調査において複数回の建替えを伴う総柱建物群を確認しており、方形区画に伴う倉院と位置付けられている。

奈良時代には、正方位の配置で掘立柱塀をめぐる方形区画が整備される。方形区画の平面規模は南北約57mを測るが、ほぼ同一の地点で2～3回の建替えが確認されている。配置をみると方形区画が東西に併存、あるいは交互に変遷を重ねている。

第197次調査地は、史跡西部の中垣内地区に所在する。齋宮段丘面（段丘中位面）の段丘崖から東へ約90mの地点に位置し、発掘調査前は畑地として土地利用されている。

調査地は第193次調査地のすぐ南で、飛鳥時代の方形区画内の構造確認を目的として調査を実施した。

2 地形環境と地層

史跡齋宮跡は、紀伊山地に端を発する櫛田川（祓川）・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高位面（明野段丘面）、段丘中位面

（齋宮段丘面）の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地（海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地）を介して、伊勢湾へと連なる。史跡齋宮跡は、段丘中位面（齋宮段丘面）に立地し、史跡西域の段丘南西部を最高所（標高約14.5m）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜する。史跡の東域では標高9m程度となり、傾斜角度は1°にも達しないほどの平坦な地盤を形成している。

第197次調査地は段丘西縁に位置し、現況が畑地の平坦面で、約14mの標高を測る。

基本層序は上から、耕作土、客土、遺物包含層、地山からなり、地山面までの深度は北端で0.7m、南端で0.45m、西端で0.55m、東端で0.5mを測る。遺構の大半は遺物包含層の上面から掘り込んでいる。遺物包含層と遺構埋土の碎屑物構成・色調が似ており、当該面での遺構検出は困難のため、地山直上で行って誤認を回避するよう努めた。

3 遺構

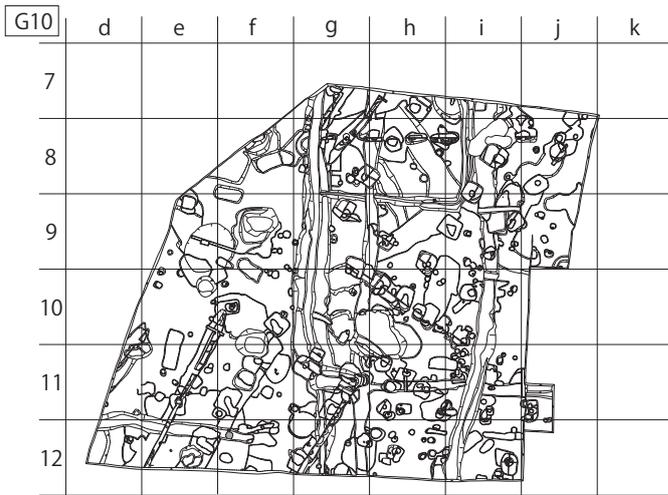
調査の結果、弥生・古墳・飛鳥・奈良時代、平安～鎌倉時代、近世の各種遺構を検出した。以下、検出遺構について時代毎に概観するが、遺構の全体・詳細は第Ⅱ-1・2表にまとめている。

(1) 弥生時代

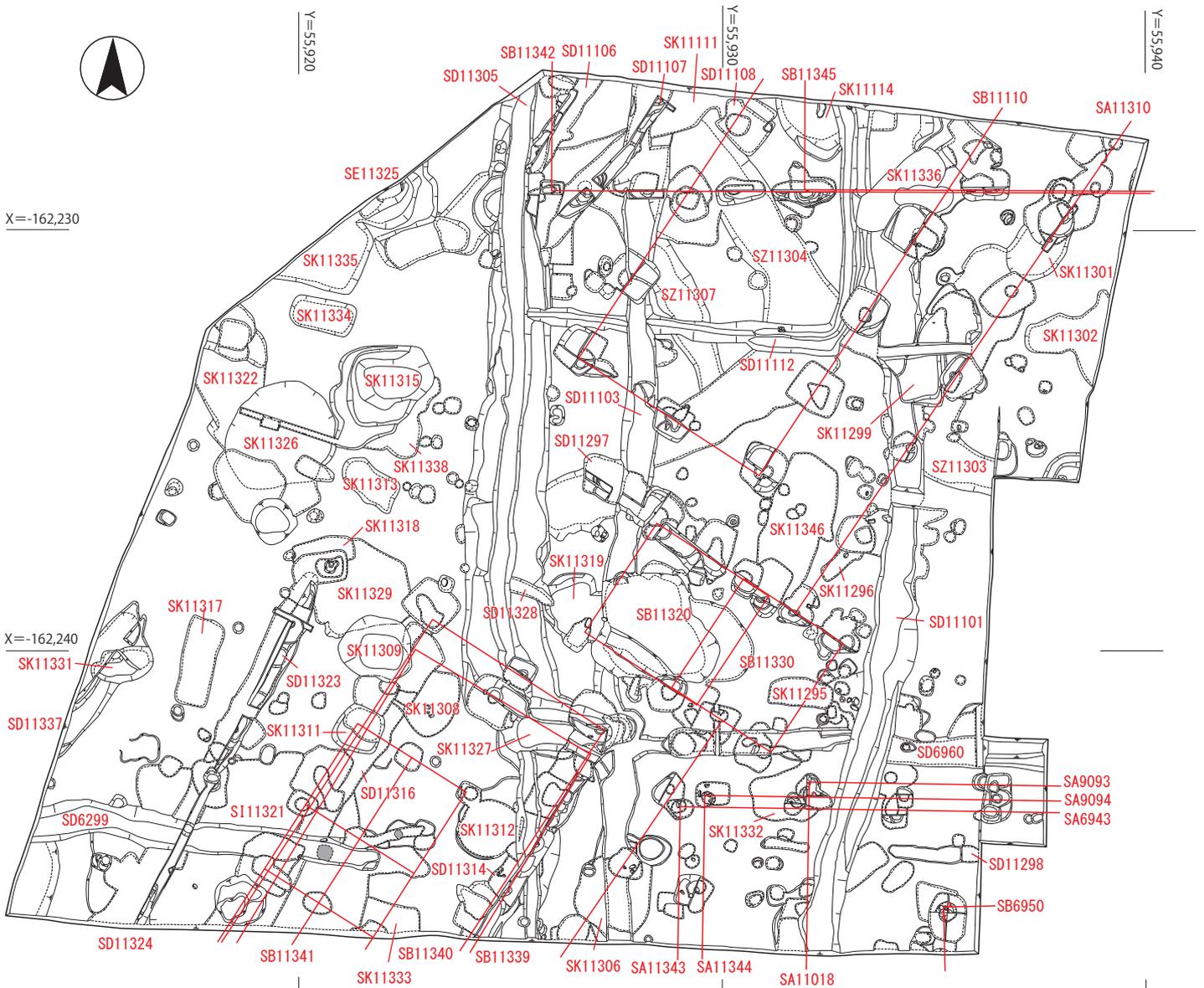
弥生時代中期中葉の方形周溝墓2基・土坑9基を確認した。

S Z 11304 調査区の北部中央で確認した。規模は周溝芯々間で5.9×8.2m、西辺は確認できない。検出面からの深さは周溝東辺中央付近で約0.2mである。東辺内側にやや細い溝が確認でき、これは拡張前の方形周溝墓S Z 11307と考える。南辺の溝で環状石斧（1）が出土した。

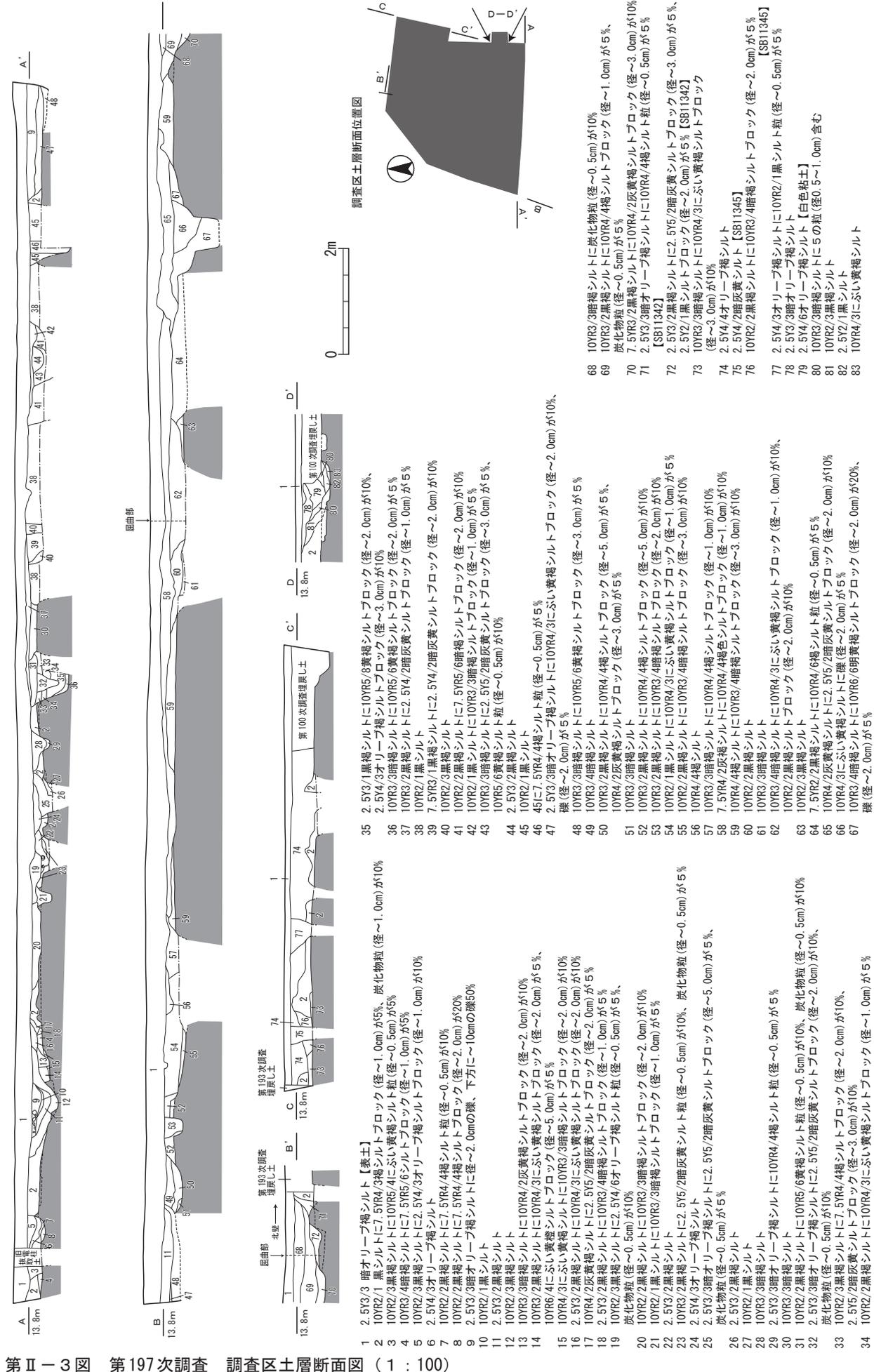
S Z 11303 調査区北東部で確認した。一辺約13mと推定され、周溝北辺・東辺、南辺の大半は調査区外へ延びる。周溝西辺の検出面からの深さは約0.2mで、溝の南西角付近で弥生土器壺（3）が出土したが、口縁部を打欠き、体部下半に焼成後穿孔が見られることから、供献土器と考えられる。



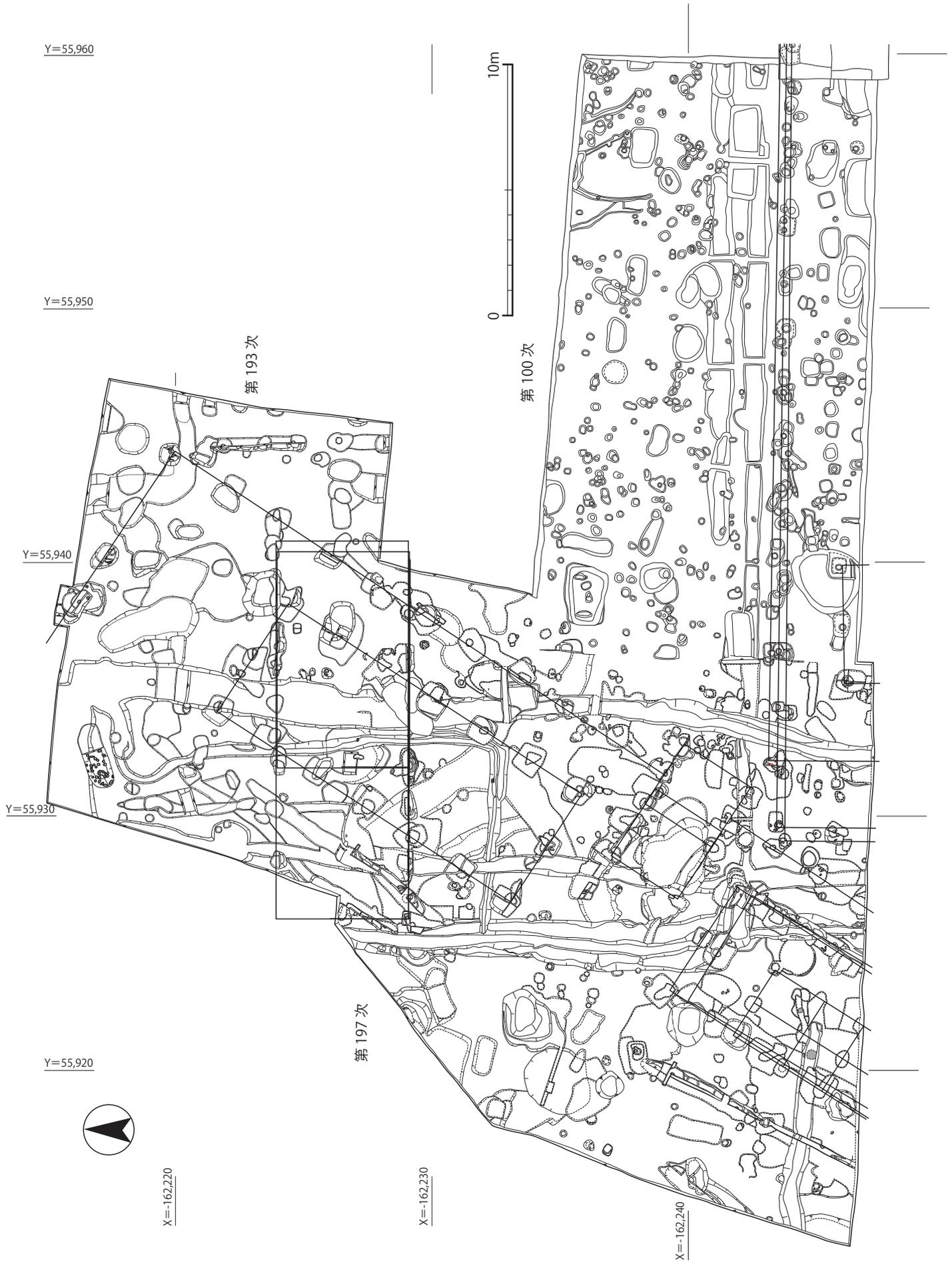
第Ⅱ-1図 第197次調査 グリッド図 (1 : 400)



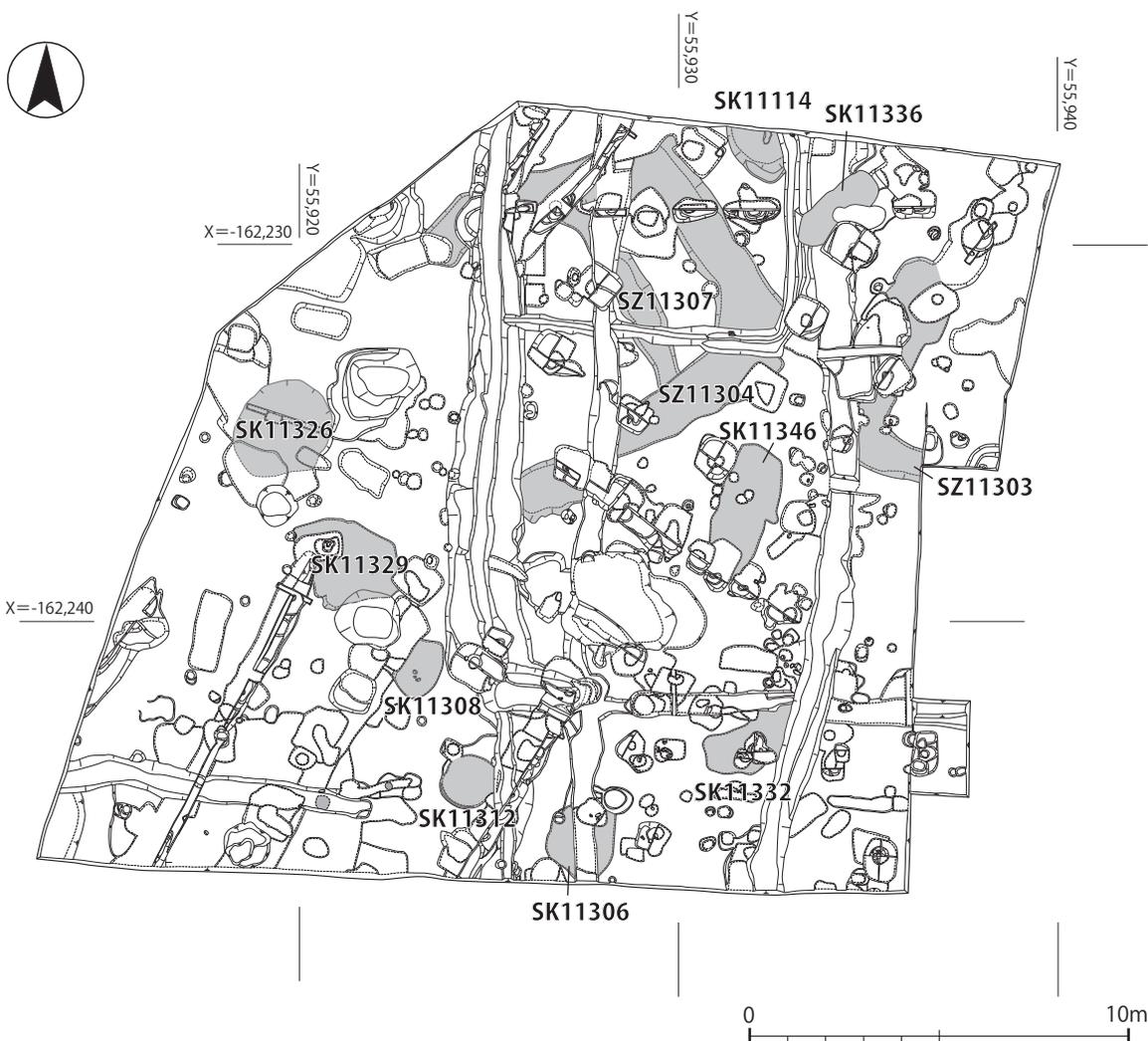
第Ⅱ-2図 第197次調査 遺構平面図 (1 : 150)



第II-3図 第197次調査 調査区土層断面図 (1:100)



第Ⅱ-4図 第197次調査と既往調査遺構平面図 (1 : 200)



第Ⅱ－５図 第197次調査 弥生時代遺構分布図（1：200）

SK11306・11308・11312・11326・11329 調査区北西から南東に並んで検出された土坑である。いずれも平面形は不整円形で、全て完掘していないが深さはSK11326は13cm、SK11329は42cmである。

SK11332・11346・11336 平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。これらは方形周溝墓の周溝の可能性はあるが、ここでは土坑としておく。

（2）古墳時代

竪穴建物1棟・土坑3基を確認した。

SI11321 調査区南西部に位置し、南4分の1ほどが調査区外へ延びる。一辺約6mで、確認した深さは検出面から約15cmである。建物東壁際に被熱面があり、そこから北東に延びる小溝があるが、この溝は煙道で、建物東辺にカマドを持つと考えられる。完掘していないため支柱穴等は確認していない。

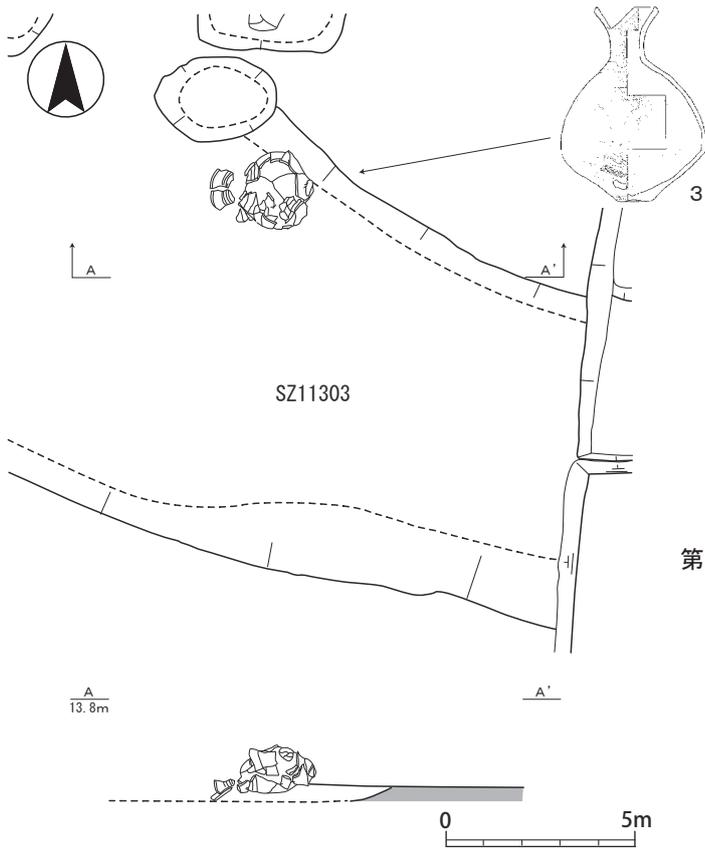
SK11335 調査区北西部に位置し、大半が調査区

外に広がる。一辺1.8mの方形を呈する。深さは底面まで掘削しておらず不明だが14cm以上と考えられる。出土遺物に土師器高杯（26）があり、包含層からではあるが土坑南辺傍らで勾玉形石製模造品（96）が出土している。

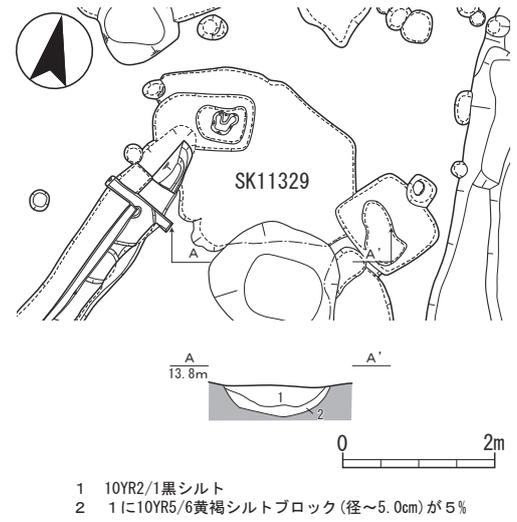
SK11333 調査区南西部、SI11321が重複する土坑である。土坑の北東角は隅丸状を呈し、SK11335のような小型土坑もしくは竪穴建物となる可能性がある。出土遺物は土師器甕片がある。

SK11301 方形周溝墓SZ11303や飛鳥時代SA11310、奈良時代SB11342・11345が重複し、全体の形状が明確でない。出土遺物は土師器甕体部片・高杯脚部片等が主体となるが図示できるような破片はない。剣形石製模造品（27）が出土している。

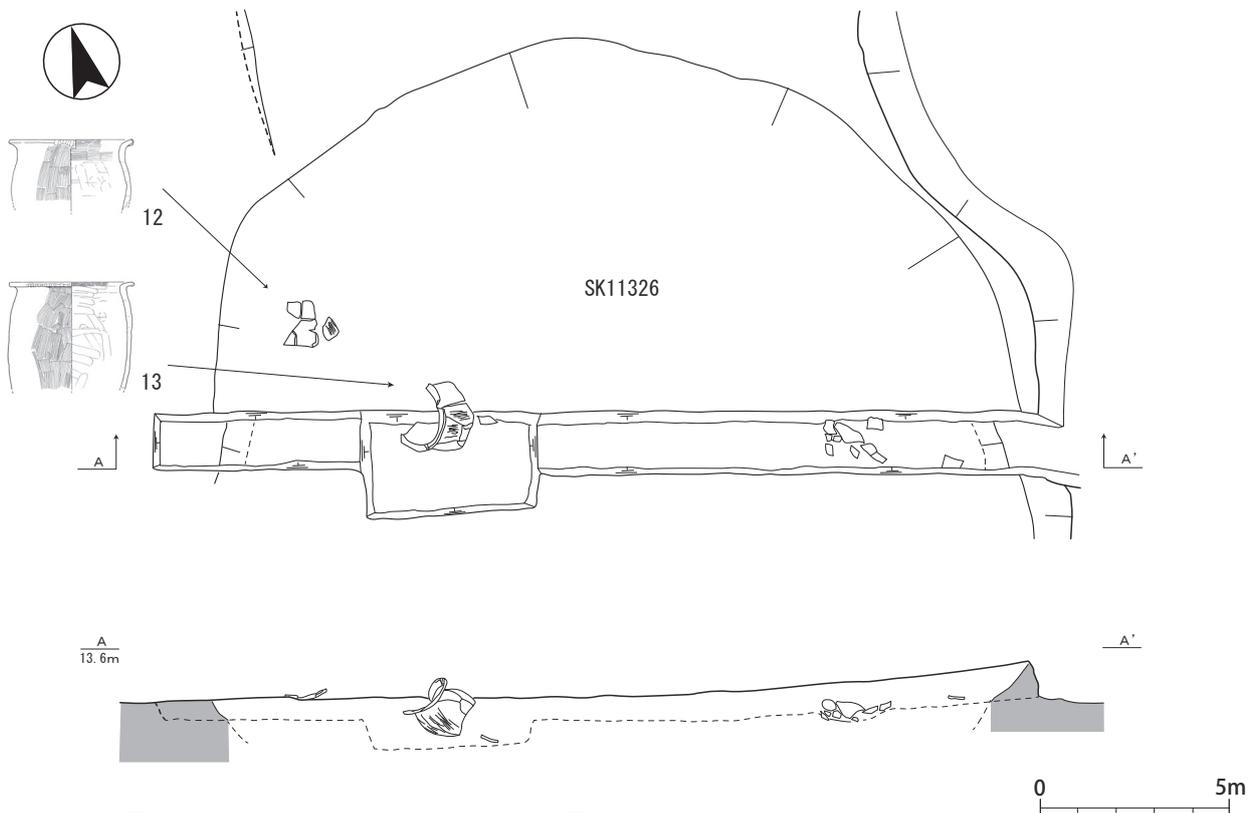
これらの遺構の時期はいずれも5世紀後半～6世紀前半の範疇に収まると考えられる。その他、包含



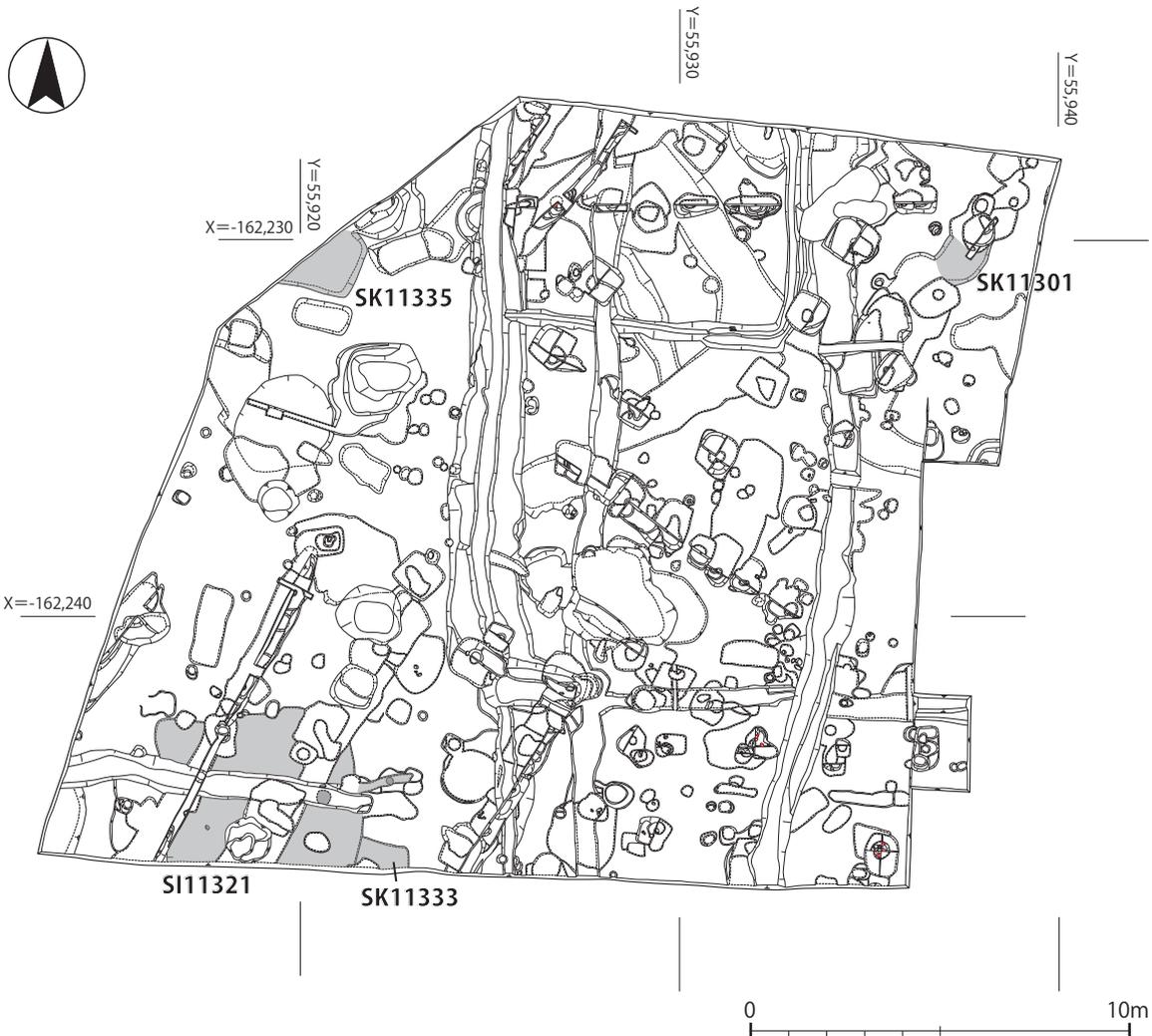
第II-6図 SZ 11303 土器出土状況平面・立面図 (1 : 20)



第II-8図 SK 11329 見通し断面図 (1 : 100)



第II-7図 SK 11326 土器出土状況平面・立面図 (1 : 20)



第Ⅱ－9図 第197次調査 古墳時代遺構分布図（1：200）

層からであるが勾玉形石製模造品（177）のほか、破片ではあるが土師器高杯が十数点分出土している。

（3）飛鳥時代

北接する第193次調査区から続く、北から東へ約33°傾く軸方向の掘立柱建物1棟と掘立柱塀1条、建替を伴う掘立柱建物1棟、門2棟などを検出した。

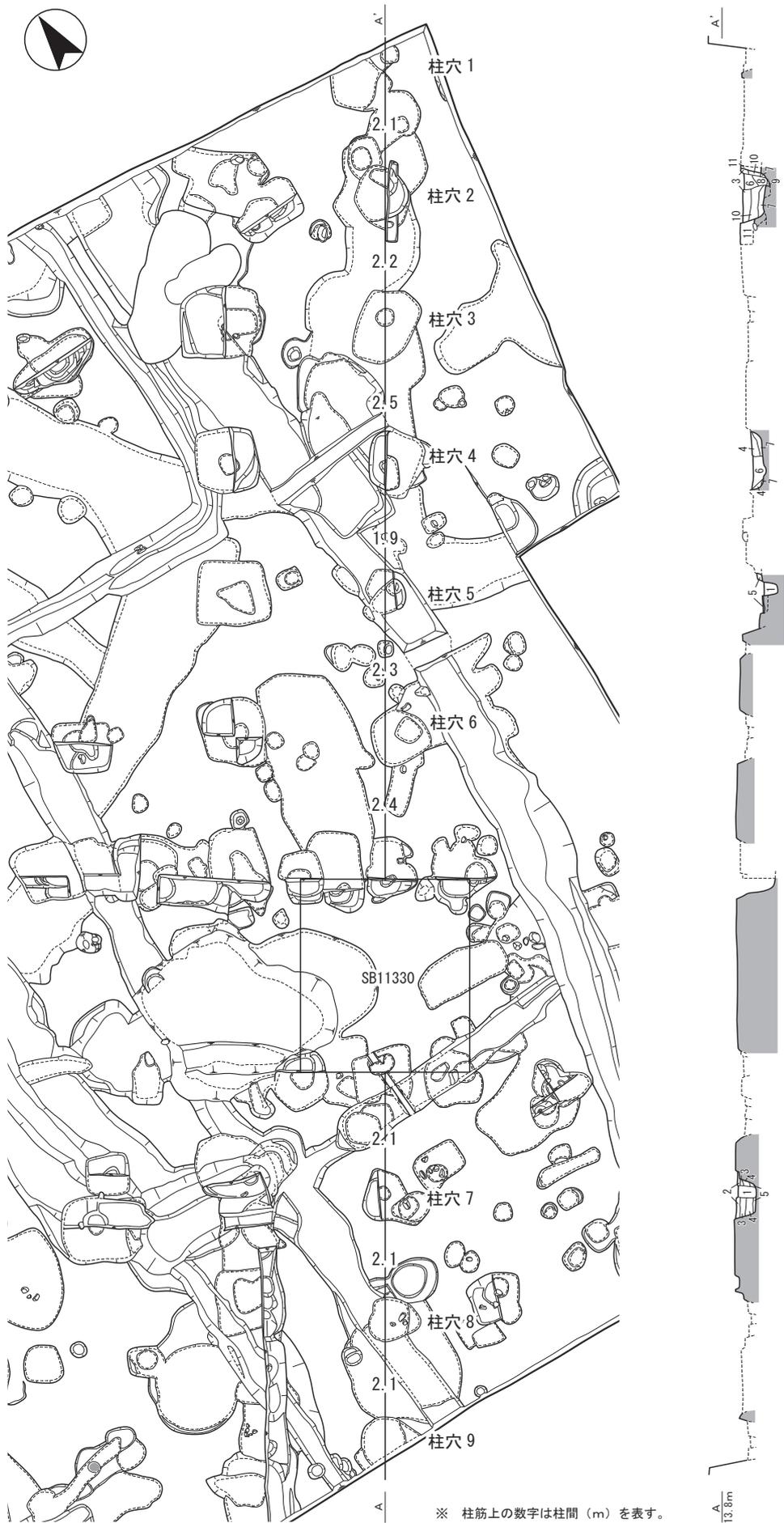
S A 11310 南北方向の掘立柱塀である。第193次調査ではS A 11120としていたが、それは区画北辺となる東西方向の塀の番号とし、南北方向は新たに遺構番号を付与した。柱掘方は一辺0.8～1.0mの不整形で、明確な方形を志向しないようである。柱掘方の深さは検出面から0.3～0.5m、柱痕跡底面の標高は12.9～13.3mである。柱直径は15～18cm、柱抜取穴は見られない。柱間は1.9～2.5mで、北東角から柱11本目と12本目の間のみ柱間3mとなり、こ

こにS B 11330が取り付く。

S B 11320 2間×1間の四脚門と考えられる。重複関係から、後述するS B 11330に先行する。北側柱列の柱穴は全て確認できるが、南側柱列の柱穴5は風倒木により一部が確認できるのみである。柱掘方は隅丸長方形で、北側柱列で見ると柱掘方の両辺を揃えるようである。柱直径は18～20cmで、柱抜取穴は5か所で確認でき、北側柱列は北側へ、南側柱列は南側へといずれも柱は外側へ倒す。北側柱列に先行するS D 11297については後述する。

S B 11330 2間×1間の四脚門と考えられる。S A 11310に取り付く。重複関係からS B 11320より新しい。柱掘方はS B 11320に比して小型の隅丸方形である。柱直径は18～20cmである。

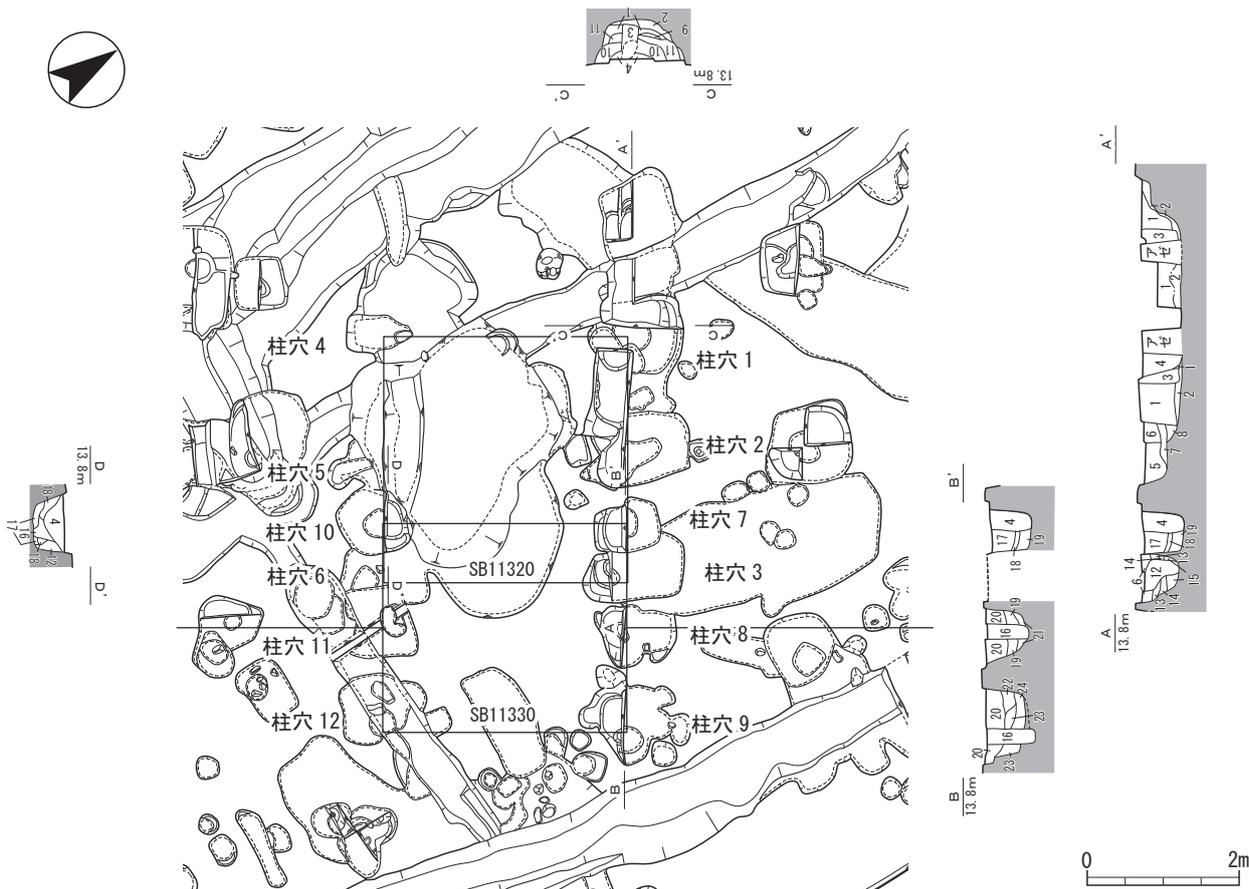
S B 11110 第193次調査で検出した掘立柱建物の南部分で、今回の調査で桁行6間×梁行2間と規模



第Ⅱ-10図 SA 11310 平面・土層断面図 (1:100)

※ 柱筋上の数字は柱間 (m) を表す。

- 1 10YR3/2暗褐シルト
- 2 10YR2/2黒褐シルトに10YR5/3にぶい黄褐シルトブロック (径~2.0cm) が5%、10YR4/4褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%
- 3 10YR3/2黒褐シルトに10YR5/3にぶい黄褐シルトブロック (径~1.0cm) が2%、10YR4/4褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%
- 4 2.5Y3/2黒褐シルトに10YR4/4褐シルトブロック (径~1.0cm) が5%
- 5 10YR3/4暗褐シルト
- 6 10YR3/4暗褐シルトに2.5Y5/6黄褐シルト粒 (径~0.5cm) が10%、7.5YR3/2黒褐シルトブロック (径~1.0cm) が5%
- 7 10YR3/2黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~5.0cm) が10%
- 8 10YR2/2黒褐シルトに2.5Y6/4にぶい黄シルト粒 (径~0.5cm) が10%
- 9 2.5Y3/2暗オリーブ褐シルト
- 10 10YR2/2黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~3.0cm) が10%
- 11 2.5Y2/1黒シルトに2.5Y4/6オリーブ褐シルトブロック (径~2.0cm) が2%



- | | |
|---|--|
| <p>1 10YR2/1黒シルトに10YR4/3にぶい黄褐シルト粒(径~1.0cm)が1%</p> <p>2 2.5Y3/2黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック(径0.5~3.0cm)が10%、10YR4/3にぶい黄褐シルトブロック(径~1.0cm)が30%</p> <p>3 5Y2/2オリーブ黒シルト</p> <p>4 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに2.5Y4/1黄灰シルトブロック(径1.0~5.0cm)が20%</p> <p>5 10YR3/1黒褐シルトに2.5Y4/4オリーブ褐色シルト粒(径~1.0cm)が10%、炭化物粒が10%、10YR5/6黄褐シルト粒(径~1.0cm)が10%、2.5Y4/1黄灰シルト粒(径~1.0cm)が10%</p> <p>6 10YR3/1黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルト粒(径~1.0cm)が10%</p> <p>7 10YR2/3黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック(径~3.0cm)が20%、礫(径0.5~2.0cm)が3%</p> <p>8 2.5Y3/2黒褐シルトに10YR3/4暗褐シルト粒(径~1.0cm)が3%</p> <p>9 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに10YR5/6黄褐シルト粒(径~0.5cm)が10%</p> <p>10 10YR2/2黒褐シルトに10YR4/2灰黄褐シルト粒(径~1.0cm)が2%、2.5Y6/3にぶい黄シルト粒(径~0.5cm)が5%</p> <p>11 10YR2/2黒褐シルトに10YR4/4褐シルト粒(径~0.5cm)が10%、礫(径~0.5cm)が5%</p> | <p>12 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに10YR4/2灰黄褐シルト粒(径~0.5cm)が10%、10YR2/2黒褐シルト粒(径~1.0cm)が5%</p> <p>13 2.5Y3/2黒褐シルトに10YR4/2灰黄褐シルトブロック(径~2.0cm)が5%</p> <p>14 2.5Y3/2黒褐シルト</p> <p>15 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに10YR5/3にぶい黄褐シルト粒(径~0.5cm)が5%、礫(粗粒砂)が5%</p> <p>16 2.5Y4/3オリーブ褐シルト</p> <p>17 10YR3/3暗褐シルトに10YR4/6褐シルトブロック(径~10cm)が20%、2.5Y5/4黄褐シルトブロック(径~2.0cm)が5%</p> <p>18 10YR3/1黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルト粒(径~0.5cm)が5%</p> <p>19 7.5Y3/2黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック(径~1.0cm)が5%</p> <p>20 10YR3/2黒褐シルトに10YR4/2暗灰褐シルト粒(径~1.0cm)が10%</p> <p>21 2.5Y4/4オリーブ褐シルトに10YR3/2黒褐シルト粒(径~1.0cm)が5%</p> <p>22 10YR3/2黒褐シルトに10YR4/3にぶい黄褐シルトブロック(径~2.0cm)が5%、礫(径~1.0cm)が5%</p> <p>23 10YR3/2黒褐シルトに2.5Y4/4オリーブ褐シルトブロック(径~10.0cm)が5%</p> <p>24 10YR4/4褐シルトに10YR3/4暗褐シルトブロック(径~1.0cm)が5%、礫(径~1.0cm)が5%</p> |
|---|--|

第Ⅱ-11図 SB11320・11330 平面・土層断面図 (1:100)

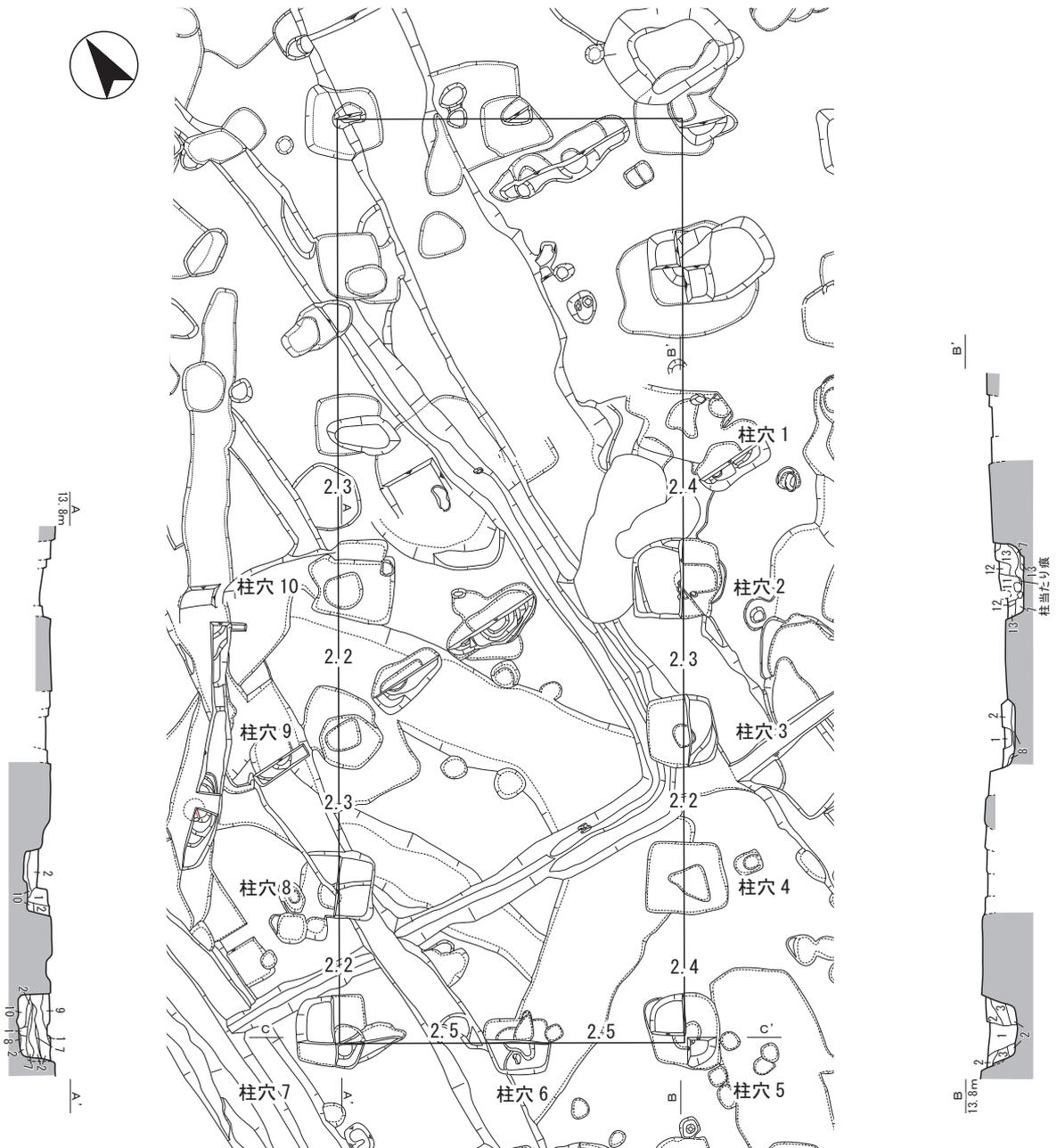
が確定できた。柱掘方の平面形は隅丸方形である。柱抜取穴が6か所確認でき、抜取穴には白色粘土(土層図では灰黄色シルトであるが、本文中では「白色粘土」とする)が充填される。柱穴2の抜取部分に白色粘土の他、円礫が入る。柱直径は20cmである。柱痕跡底の標高は側柱でおおよそ13m、妻柱で13.2mと妻柱が浅い。

SB11339 調査区南部で検出した桁行4間以上×梁行2間の掘立柱建物である。桁行柱筋は布掘り、妻柱は壺掘りとなる。北に位置するSB11110と比較すると、東へ0.4mずれて建てられている。建替えを伴うため、全ての柱を確認できていない。柱抜取穴が3か所で確認でき、その埋土には白色粘土が

入る。

SB11340 SB11339に重複して北に0.9m、西に0.2mずらして建てられている。桁行4間以上×梁行2間で、掘方は壺掘りである。柱痕跡は明確ではないが、西側柱で2か所、東側柱で3か所確認している。柱抜取穴は4か所確認でき、西側に柱を倒しているようである。柱掘方埋土と柱抜取穴には白色粘土が確認できる。

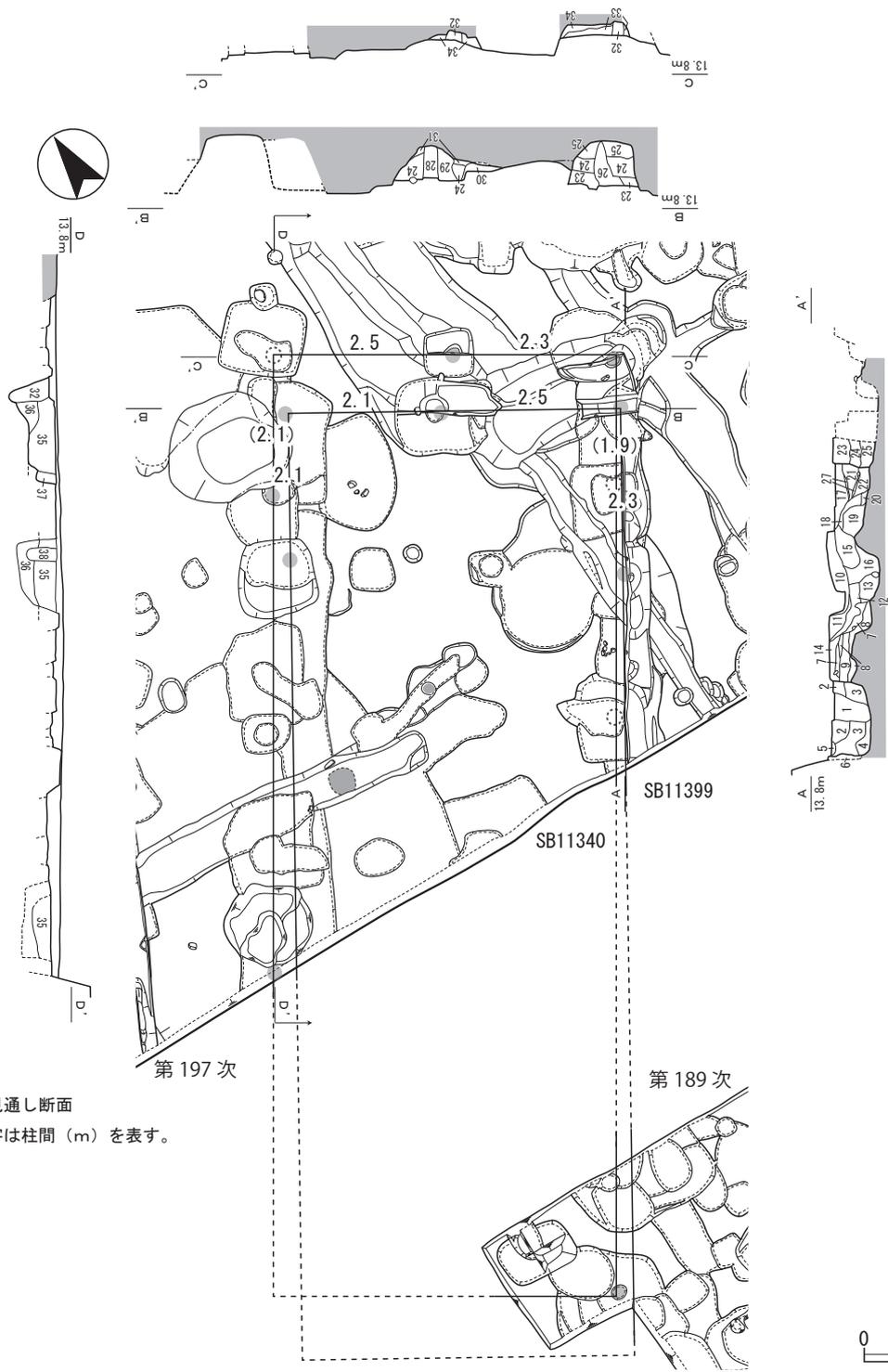
SD11107 SB11110の西で検出した全長3.9m、幅0.5~0.7mの溝である。北部分は第193次調査で確認している。縦断方向に半截したところ、底面が2か所深い箇所があり、土層断面観察においてその箇所に柱痕跡を確認した。溝の縦断形状は、底面が



※ 柱筋上の数字は柱間 (m) を表す。

- 1 10YR3/3暗褐シルトに2.5Y5/2暗灰黄シルトブロック (径~5.0cm) が20%
- 2 10YR2/2黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~5.0cm) が10%
- 3 10YR3/3暗褐シルトに10YR2/2黒褐シルトが50%
- 4 10YR2/1黒シルトに10YR6/8明黄褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%
- 5 10YR3/1黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルト粒 (径~0.5cm) が10%【SZ11304埋土】
- 6 10YR4/3にぶい黄褐シルト
- 7 10YR4/4褐シルトに10YR2/2黒褐シルトブロック (径~1.0cm) が3%
- 8 10YR3/4暗褐シルト
- 9 10YR3/4暗褐シルトに10YR2/1黒シルトブロック (径~1.0cm) が5%
- 10 10YR2/3黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~5.0cm) が10%
- 11 2.5Y4/2暗灰黄シルトに10YR2/2黒褐シルト粒 (径~1.0cm) が1%
- 12 10YR2/2黒褐シルトに2.5Y4/2暗灰黄シルトブロック (径~3.0cm) が30%
- 13 10YR2/2黒褐シルトに10YR4/6褐シルト粒 (径~1.0cm) が20%

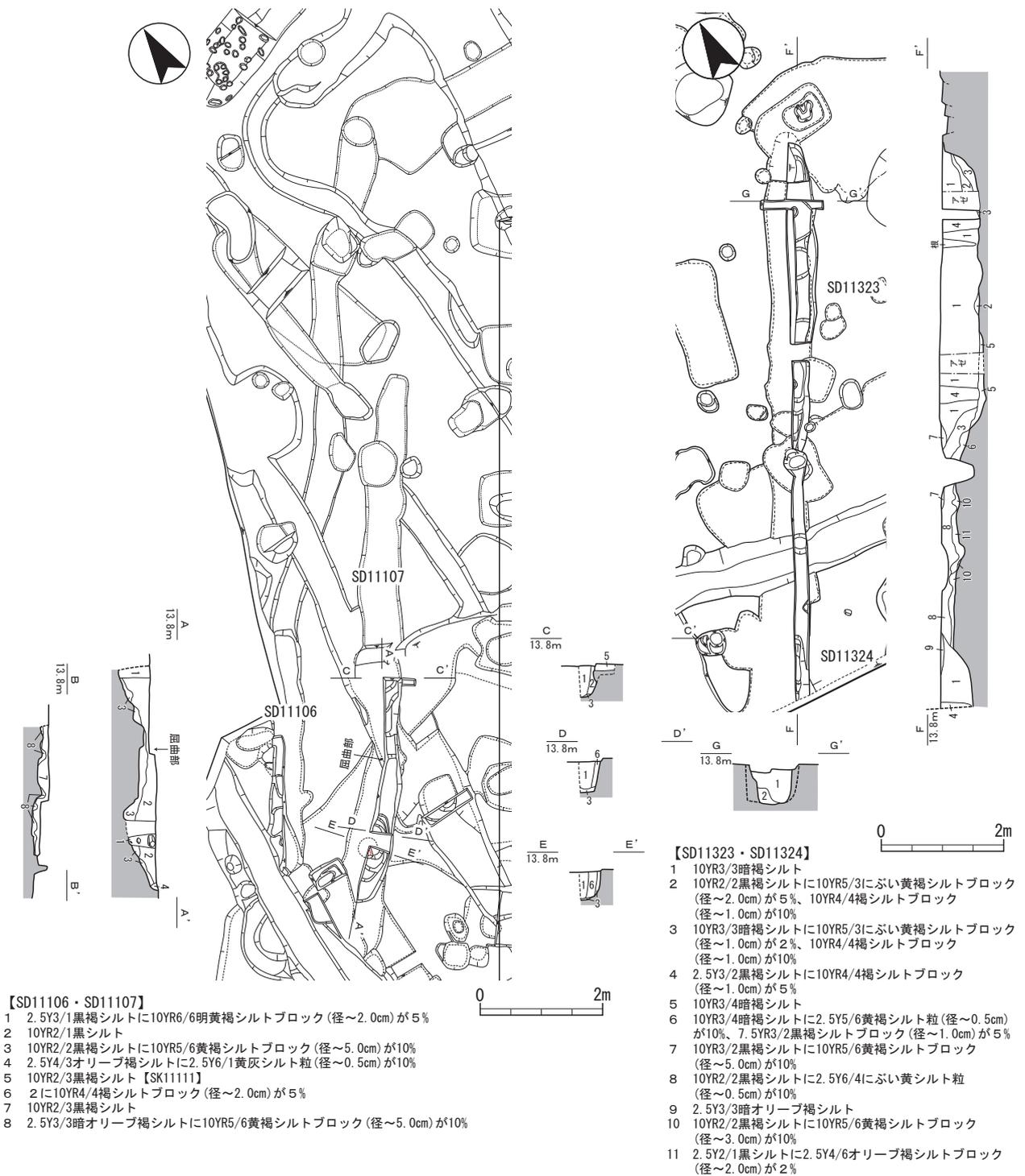
第Ⅱ-12図 SB11110 平面・土層断面図 (1:100)



- ※ 西側柱筋は見通し断面
- ※ 柱筋上の数字は柱間 (m) を表す。

- | | |
|---|--|
| <p>1 2.5Y5/2暗灰黄シルトに10YR5/4にぶい黄褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%</p> <p>2 7.5YR3/2黒褐シルトに7.5YR5/6明褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%、10YR3/1黒褐シルトブロック (径~1.0cm) が5%</p> <p>3 10YR3/3暗褐シルトに2.5Y5/6黄褐シルト粒 (径~0.5cm) が10%、10YR3/3黒褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%</p> <p>4 2.5Y暗オリーブ褐シルトに2.5Y6/4にぶい黄シルトブロック (径~3.0cm) が20%</p> <p>5 10YR4/4褐シルト</p> <p>6 10YR2/3黒褐シルトに2.5Y5/4黄褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%</p> <p>7 10YR5/6黄褐シルト</p> <p>8 10YR3/4暗褐シルト</p> <p>9 10YR2/3黒褐シルトに2.5Y5/4黄褐シルトブロック (径~2.0cm) が30%</p> <p>10 7.5YR3/2黒褐シルト 【SD11305】</p> <p>11 2.5Y4/3オリーブ褐シルトに2.5Y5/2暗灰黄シルトブロック (径~1.0cm) が10%、10YR2/2黒褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%</p> <p>12 10YR2/1黒シルトに7.5YR5/6明褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%</p> <p>13 7.5YR3/2黒褐シルトに2.5Y5/4黄褐シルトブロック (径~3.0cm) が30%</p> <p>14 10YR3/2黒褐シルト</p> <p>15 10YR3/3暗褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~2.0cm) が10%、2.5Y4/6オリーブ褐シルトブロック (径~2.0cm) が10%</p> <p>16 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~1.0cm) が5%、2.5Y2/1黒シルトブロック (径~1.0cm) が5%</p> <p>17 10YR2/1黒シルトに2.5Y5/3黄褐シルト</p> <p>18 2.5Y4/3オリーブ褐シルト</p> <p>19 10YR3/3暗褐シルトに2.5Y5/6黄褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%、7.5YR2/1黒シルトブロック (径~1.0cm) が5%</p> | <p>20 10YR3/2黒褐シルトに10YR4/6褐シルトブロック (径~2.0cm) が5%</p> <p>21 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに2.5Y4/4オリーブ褐シルトブロック (径~1.0cm) が5%</p> <p>22 10YR2/1黒シルトに7.5YR4/4褐シルトブロック (径~2.0cm) が5%</p> <p>23 10YR3/4暗褐シルトに2.5Y5/4黄褐シルト粒 (径~0.5cm) が10%、5Y2/2オリーブ黒シルト粒 (径~0.5cm) が10%</p> <p>24 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに2.5Y4/2暗灰黄シルトブロック (径~5.0cm) が10%</p> <p>25 10YR2/3黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~1.0cm) が10%、10YR2/1黒シルトブロック (径~1.0cm) が10%</p> <p>26 2.5Y4/2暗灰黄シルトに10YR2/1黒シルト粒 (径~0.5cm) が5%</p> <p>27 10YR5/6黄褐シルト</p> <p>28 2.5Y4/2暗灰黄シルト</p> <p>29 10YR2/7黒褐シルトに10YR6/4にぶい黄橙シルト粒 (径~0.5cm) が5%、7.5YR2/2黒褐シルト粒 (径~0.5cm) が5%</p> <p>30 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルト 【SK11327】</p> <p>31 2.5Y3/2黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~1.0cm) が5%</p> <p>32 2.5Y5/2暗灰黄シルト</p> <p>35 10YR3/2黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~2.0cm) が10% 【SD11316】</p> <p>36 10YR2/3黒褐シルトに10YR4/4褐シルトブロック (径~5.0cm) が10%</p> <p>37 10YR2/3黒褐シルトに10YR4/3にぶい黄褐シルトブロック (径~3.0cm) が5%、10YR2/1黒シルト粒 (径~1.0cm) が5%</p> <p>38 10YR3/3暗褐シルト</p> <p>32 2.5Y4/2暗灰黄シルト</p> <p>33 10YR3/1黒褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック (径~5.0cm) が20%</p> <p>34 10YR4/4褐シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトブロック (径~2.0cm) が5%</p> |
|---|--|

第II-13図 SB11339・11340 平面・土層断面図 (1:100)



第Ⅱ-14図 SD11106・11107・11323・11324 平面・土層断面図 (1:100)

溝南端から0.7mかけて傾斜し、柱痕跡部分に達し、また0.2mかけて立ち上がる。浅い床面と柱痕跡底部との比高は0.2~0.3mである。横断形状はほぼ箱型で、溝の壁面は整形していない。また、柱痕跡部分以外の埋土は暗褐色シルト土であり、地山ブロックの混入はない。

SD11323 SB11339・11340の西に位置する全長5.9m、幅0.7~0.8mの溝である。南部分は古墳時代SI11321に重複するが、埋土はにぶい黄色シルト

粒の混入の有無でしか判断できないほど類似する。溝の主軸方向はN27°Eと飛鳥時代の他の遺構とはやや異なる。縦断面形は、北端から0.4mかけて緩やかに下がり、検出面から0.65mの深さで3.9mほぼ平坦となり、そこからまた1.7mかけて立ち上がる。横断面形は箱型、もしくは底部付近がややオーバーハングする場所もあり、壁面は整形していない。底面では段丘礫が露出する。溝埋土は黒色土であり、地山ブロックの混入はない。わずかな暗褐色土の混

入と底面の圧痕の観察により、直径15cm程の柱痕跡を2か所確認した。柱抜取穴はない。破片も含めて遺物は非常に少なく、溝として一定期間開いていた状況ではないと思われる。また、土層断面から滞水状況は見られない。

S D 11324 S D 11323の南に軸を同じくして伸びる。当初はS D 11323の延長として縦断方向に半截したところ、底面が立ち上がり一旦途切れることから、別遺構と判断し、別途遺構番号を付与した。

検出長1.3m、幅は0.8mで、縦断面形は北から0.9mかけて検出面からの深さ0.5mまで傾斜し、その深度を保って調査区壁まで延びる。横断面形状は箱型、もしくは袋状となり、溝壁面は整形していない。底面はこのあたりの段丘礫を含む面が露出する。溝埋土は黒褐色シルトで、地山ブロックの混入はない。わずかな褐色シルトブロックの混入と底面の圧痕の観察により直径15cm程の柱痕跡を1か所確認した。出土遺物は弥生土器甕片など細片が多く、古墳時代土師器高杯細片などがわずかに含まれることから、古墳時代後期以降に掘削された溝といえる。

S D 11297 S B 11320の北側柱筋が重複する溝である。長さ3.8m、幅1.0mで深さは0.6mである。横断面形は箱型で、溝壁面は整形していない。縦断面形は西端から0.6mかけて深さ0.6mまで傾斜し、そのまま東端まで深度を保つようである。東端はS B 11320の柱穴が重複するため不明である。S B 11320に伴う布掘り溝とも考えられるが、溝の埋土である黒色土が検出面まで確認され、それに重複してS B 11320の柱掘方が掘削されていること、S B 11320の南柱筋では同様の溝が確認されないことから、S B 11320に伴うものではないと現段階では判断する。出土遺物は弥生土器(29・30)、7世紀前半代の須恵器・土師器(32～34)の他、6～7世紀前半代と思われる土師器甕体部片等があることから、S B 11320掘削以前に埋没したと考えられる。土器は細片ばかりであること、溝の壁面が整えられていないことなどから、溝は掘削してすぐ埋められ、土器片はその際に混入したと思われる。

S B 11341 調査区南部で確認した2間×3間以上の総柱建物である。柱間は1.5mで、柱直径は約15cmである。南北方向は西側柱の柱を調査区壁面で確認

しており、少なくとも3間であると判断した。東西方向は西側には延びないようであるが、東側にはもう1間延びる可能性はあるものの、ちょうどS B 11339・11340の東側柱列が重複し、確認できない可能性がある。

(4) 奈良時代

奈良時代の遺構は、隣接地の調査によりほぼ正方位を向くことがわかってきている。今回の調査においても、東西棟の掘立柱建物2棟以上、南北棟と思われる掘立柱建物1棟、東西方向の掘立柱塀3条、南北方向の掘立柱塀3条、溝1条を確認した。

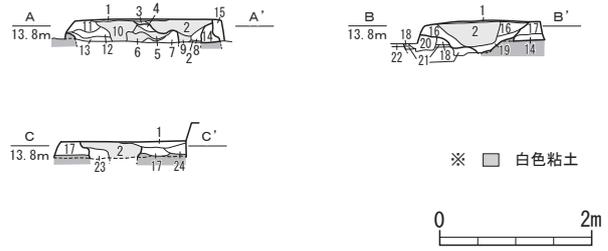
S B 11342・11345 東西棟の掘立柱建物である。北半部が第193次調査で確認されており、同調査では2回の建替えを伴う掘立柱塀とされたが、今回の調査により建替えを伴う掘立柱建物と判断した。今後の整理の煩雑さを避けるため、新たに遺構番号を付与した。

古相の建物はS B 11342で、桁行7間×梁行2間の東西棟と考えられる。柱掘方の形状は柱穴1(西梁柱)・柱穴2(南西隅柱)は方形だが、それ以外は不整形を呈す。柱間は2.0～2.2mで等間隔ではない。S B 11345はS B 11342よりも新しい桁行4間×梁行2間の建物として復元したが、西の妻柱が確認できていないため検討の余地が残る。柱穴8～10等は重複する柱がまだ見られることから、もう1棟別の建物が考えられるが、今回の調査では明確にできなかった。

S B 11342・S B 11345とも、柱掘方・柱抜取穴には白色粘土がブロック状に入るか、もしくは白色粘土単層で充填される。

調査区南東部の掘立柱塀群 史跡西部で確認されている2つの奈良時代方形区画のうち、東側の区画については第100次・144次調査で東西方向の掘立柱塀が確認され、第100次調査では4条、その東側の調査である第144次調査では2条に復元されている。今回の調査では、南側の第189次調査成果と合わせ、東側区画の北西隅部分が確認できた。

今回確認した範囲では、掘立柱塀は2回の建替えがあり、1回目の建替え時に西へ1間分(2.7m)拡張し、2回目の建替えでもその場所を踏襲している。いずれの掘立柱塀の柱穴も柱抜取穴は見られない。



- 1 10YR2/3黒褐シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトが層状に入る【包含層】
- 2 10YR3/3暗褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐シルトブロック（「白色粘土」、径～5.0cm）が10%
- 3 10YR2/2黒褐シルトに10YR1.7/1黒シルト粒（径～1.0cm）が15%
- 4 10YR3/3暗褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐シルト粒（「白色粘土」、径～1.0cm）が5%
- 5 10YR3/2黒褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐シルト（「白色粘土」、径～2.0cm）、10YR1.7/1黒シルト粒（径～2.0cm）が10%
- 6 10YR3/3暗褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐シルトブロック（「白色粘土」、径～4.0cm）が10%、10YR1.7/1黒シルト粒（径～1.0cm）が5%
- 7 7.5YR2/1黒シルト【SD11297埋土】
- 8 10YR2/2黒褐シルトに10YR6/4にぶい黄褐シルトブロック（径～1.0cm）が5%
- 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐シルト（「白色粘土」）が層状に入る
- 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐シルトブロック（「白色粘土」、径2.0～5.0cm）が5%
- 11 10YR3/2黒褐シルト
- 12 2.5Y3/2黒褐シルトに10YR4/4褐シルト粒（径～0.5cm）が10%
- 13 10YR2/2黒褐シルトに10YR4/4褐シルトブロック（径～2.0cm）が5%
- 14 10YR3/4暗褐シルトに7.5YR3/2黒褐シルトブロックが10%
- 15 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルト【風倒木】
- 16 7.5YR2/3極暗褐シルト
- 17 10YR3/4暗褐シルト
- 18 10YR3/3暗褐シルトに10YR1.7/1黒シルト粒（径～0.2cm）、2.5Y5/3黄褐シルト粒（径～0.2cm）が10%
- 19 7.5YR3/2黒褐シルト
- 20 10YR4/2灰黄褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐シルト粒（白色粘土、径～0.5cm）が10%
- 21 10YR3/3暗褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック（径～1.0cm）と7.5YR2/1黒シルトブロック（径～1.0cm）が10%
- 22 7.5YR2/2黒褐シルト
- 23 10YR3/4暗褐シルトに10YR5/6黄褐シルト粒（径0.5～1.0cm）が入る
- 24 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルト

第Ⅱ－15図 「白色粘土」確認箇所土層断面図（1：100）

以下、対応する個々の掘立柱塀について見ていく。

S A 9093・11018 最初期の掘立柱塀である。柱掘方の形状は不整円形で、S A 9094が重複するため土層断面ではわからないが、柱直径は平面検出で0.2m、底面の深さは検出面から0.45m（標高13.2m）である。柱間は2.1～2.6mである。今回の調査で、東西方向S A 9093は19間（44.5m）以上、南北方向S A 11018は7間（16.5m）以上となった。

S A 6943・11343 1回目の建替えによる掘立柱塀である。柱掘方の形状は隅の柱以外は隅丸長方形に近い。柱直径は18cm、深さは検出面から0.6m（標高13m）である。柱間は2.1～2.7mである。東西方向S A 6943は13間（32m）以上、南北方向S A 11343は7間以上（16.5m）以上と考えられる。

S A 9094・11344 2回目の建替えによる掘立柱塀である。東西方向S A 9094は隅の柱穴が比較的整った隅丸長方形を呈するが、第197次調査地内で検出した他の柱穴2か所は大きさも平面形も揃わない。柱直径は15cm、底面の深さは検出面から0.4m（標高

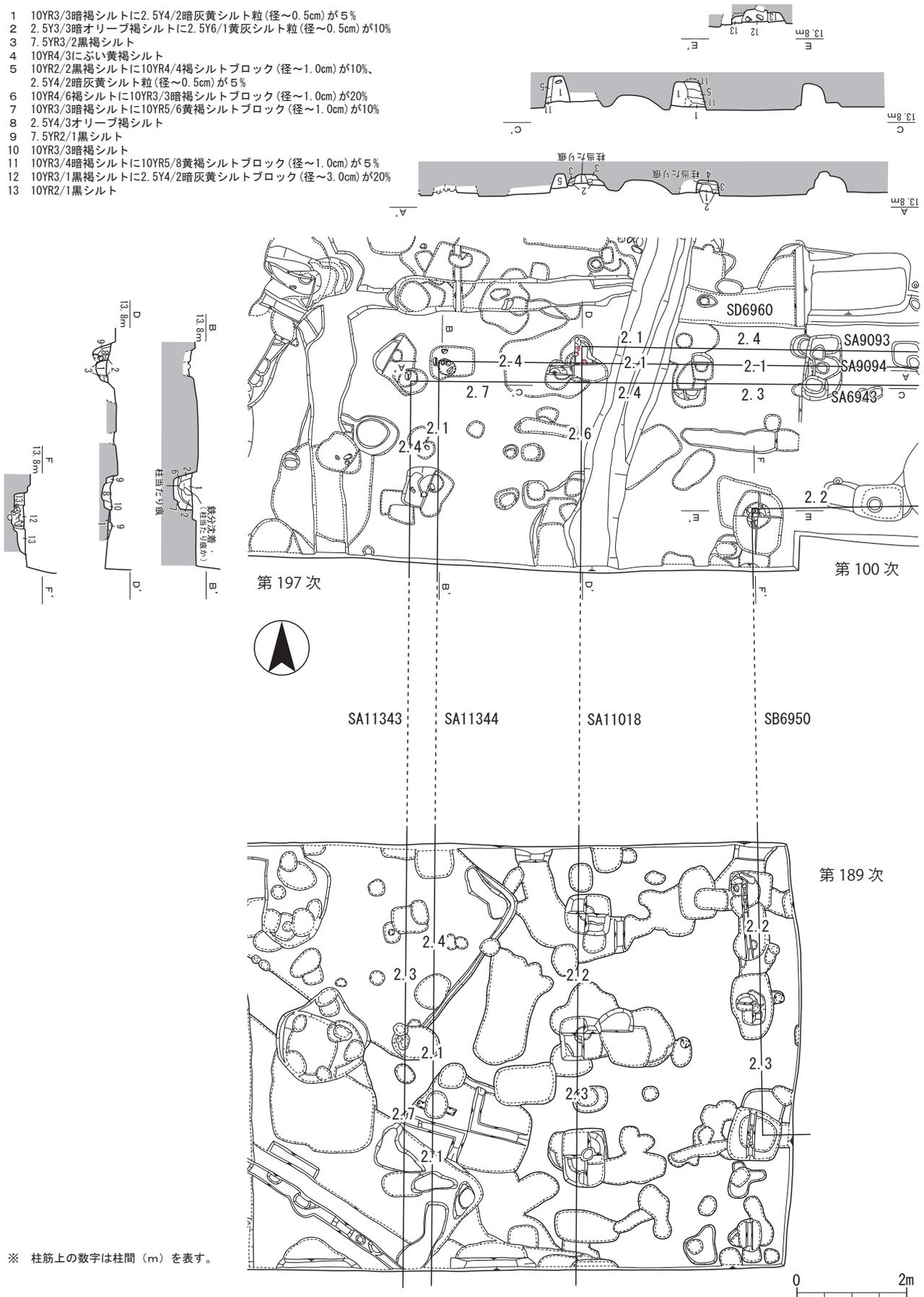
13.2m）である。柱間は2.1～2.4mである。今回の調査で、東西方向S A 9094は21間（46m）以上、南北方向S A 11344は7間（16.5m）以上となった。

S D 6960 掘立柱塀と方向を同じくし、拡張された2時期の掘立柱塀に沿ってL字状に屈曲する溝である。特に、1回目の建替えによるS A 6943・11343とは溝芯々からの距離が1.4mと同じであることから、1回目の建替えに伴って掘削されたと考えられる。第100次調査区へ延び、東西方向の長さは約29m、南北方向は本調査区内では約5mを確認できるが、第189次調査区では近世のS D 11020が重複し、検出できていない。溝の断面形は逆台形状を呈し、埋土土層には白色粘土が混じる。形状等から区画を意識した溝と考えられる。

S B 6950 第100次・第189次調査で確認されている柱穴と対応し、桁行5間×梁行2間の建物となる。柱掘方は隅丸長方形を呈し、柱抜取穴には白色粘土と円礫が充填される。

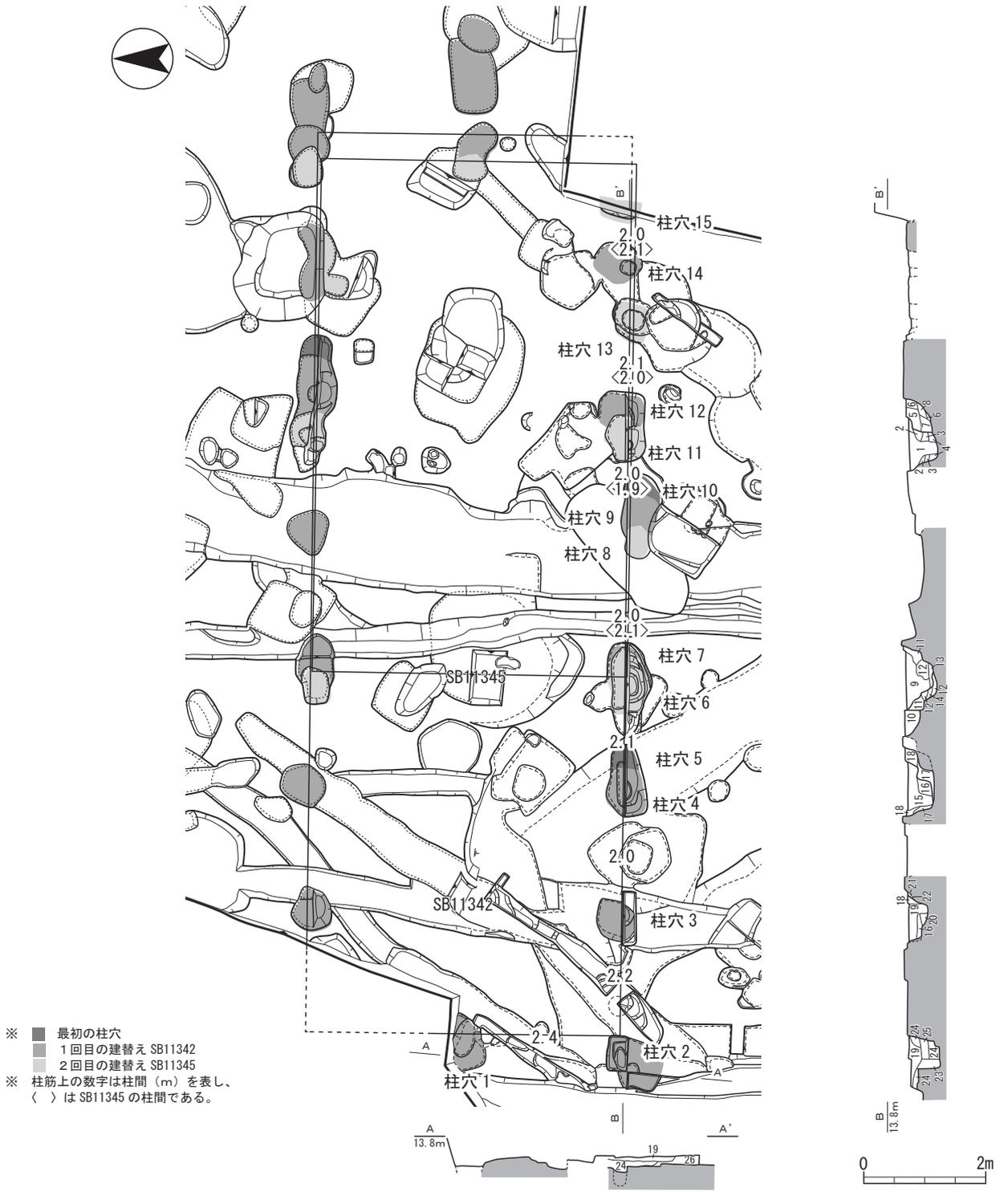
（5）平安時代末～鎌倉時代、近世

- 1 10YR3/3暗褐シルトに2.5Y4/2暗灰黄シルト粒(径~0.5cm)が5%
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに2.5Y6/1黄灰シルト粒(径~0.5cm)が10%
- 3 7.5YR3/2黒褐シルト
- 4 10YR4/3にぶい黄褐シルト
- 5 10YR2/2黒褐シルトに10YR4/4褐シルトブロック(径~1.0cm)が10%、
2.5Y4/2暗灰黄シルト粒(径~0.5cm)が5%
- 6 10YR4/6褐シルトに10YR3/3暗褐シルトブロック(径~1.0cm)が20%
- 7 10YR3/3暗褐シルトに10YR5/6黄褐シルトブロック(径~1.0cm)が10%
- 8 2.5Y4/3オリーブ褐シルト
- 9 7.5YR2/1黒シルト
- 10 10YR3/3暗褐シルト
- 11 10YR3/4暗褐シルトに10YR5/8黄褐シルトブロック(径~1.0cm)が5%
- 12 10YR3/1黒褐シルトに2.5Y4/2暗灰黄シルトブロック(径~3.0cm)が20%
- 13 10YR2/1黒シルト



※ 柱筋上の数字は柱間 (m) を表す。

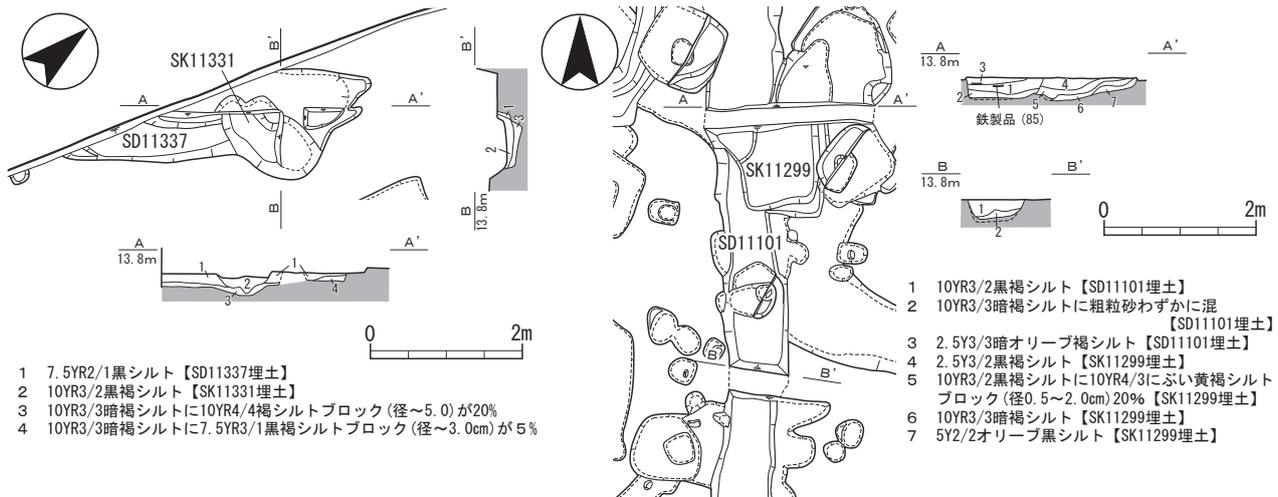
第II-16図 調査区南東部の掘立柱群 平面・土層断面図 (1:100)



- ※ ■ 最初の柱穴
- 1回目の建替え SB11342
- 2回目の建替え SB11345
- ※ 柱筋上の数字は柱間 (m) を表し、
() は SB11345 の柱間である。

- | | |
|---|---|
| <p>1 2.5Y5/2暗灰黄シルトに炭化物粒(径~0.5cm)が5%、7.5YR7/4にぶい橙シルト粒(径~0.5cm)が5%</p> <p>2 10YR2/3暗褐シルトに炭化物粒(径~1.0cm)が15%</p> <p>3 10YR3/3暗褐シルトに7.5YR7/4にぶい橙シルトブロック(径~1.5cm)が15%、炭化物粒(径~1.0cm)が10%</p> <p>4 10YR2/2黒褐シルトに7.5YR7/4にぶい橙シルトブロック(径~1.0cm)が5%</p> <p>5 10YR4/3にぶい黄褐シルトに2.5Y5/2暗灰黄シルトブロック(径~2.0cm)が10%、7.5YR7/4にぶい橙シルトブロック(径~1.0cm)が5%、炭化物粒(径~0.5cm)が5%</p> <p>6 10YR3/4暗褐シルトに7.5YR7/4にぶい橙シルトブロック(径~1.0cm)が15%、炭化物粒(径~0.5cm)が10%</p> <p>7 10YR4/3にぶい黄褐シルトに7.5YR7/4にぶい橙シルトブロック(径~1.0cm)が3%、炭化物粒(径~1.0cm)が2%</p> <p>8 2.5Y4/4オリーブ褐シルトに7.5YR7/4にぶい橙シルト粒(径~0.5cm)が10%、炭化物粒(径~0.5cm)が5%、2.5Y5/2暗灰黄シルトブロック(径~1.0cm)が5%</p> <p>9 2.5Y5/2暗灰黄シルト</p> <p>10 10YR3/2黒褐シルトに10YR4/3にぶい黄褐シルトブロック(径~3.0cm)が10%</p> <p>11 10YR3/2黒褐シルト</p> | <p>12 10YR5/6黄褐シルト(著しく硬化)に10YR3/4暗褐シルトブロック(径~2.0cm)が20%</p> <p>13 10YR3/2黒褐シルト</p> <p>14 10YR2/1黒シルト</p> <p>15 10YR2/3黒褐シルトに10YR4/6褐シルトブロック(径~5.0cm)が2%</p> <p>16 10YR3/2黒褐シルトに10YR4/6褐シルトブロック(径~5.0cm)が2%</p> <p>17 2.5Y3/3暗オリーブ褐シルトに10YR4/6褐シルトブロック(径~5.0cm)が15%</p> <p>18 10YR3/4暗褐シルト</p> <p>19 2.5Y4/3オリーブ褐シルトに2.5Y6/1黄灰シルト粒(径~0.5cm)が10%</p> <p>20 10YR3/3暗褐シルトに2.5Y6/1黄灰シルト粒(径~0.5cm)が10%、7.5YR7/4にぶい橙シルト粒(径~0.5cm)が5%</p> <p>21 7.5YR3/1黒褐シルトに10YR4/6褐シルトブロック(径~1.0cm)が5%</p> <p>22 10YR2/1黒シルト【SZ11304埋土】</p> <p>23 10YR3/3暗褐シルトに10YR4/6褐シルト粒(径~0.5cm)が5%</p> <p>24 10YR2/3黒褐シルトに2.5Y6/6明黄褐シルト粒(径~0.5cm)が10%</p> <p>25 2.5Y4/3オリーブ褐シルト</p> <p>26 10YR2/2黒褐シルト【SD11106埋土】</p> |
|---|---|

第Ⅱ-17図 SB11342・11345 平面・土層断面図(1:100)



第Ⅱ-18図 SD11337・SK11331、SD11101 平面・土層断面図(1:100)

屋敷地を区画する溝群がある。また、調査区全域で多数のピットが確認でき、その中には根石となる円礫を伴うピットがあることから、いくつかは掘立柱建物の柱穴と考えられるが遺構の重複が多く、建物として認識できなかった。

SD 6299 第85-8次調査地から延びるやや弧を描く溝で、当調査区内では東西方向に9.5m直進して途切れる。時期は土師器小皿(70)から11世紀後葉~12世紀前半と考えられる。

SE 11325 大部分が調査区外へと伸びるため完掘はできず、底面の深さは不明である。形状から素掘りの井戸と思われる。13世紀後半~14世紀前半代の南伊勢系土師器(75・76)が出土した。

SD 11101・11103・11305 いずれも南北方向にほぼ直線に延びる溝であり、土地区画や排水機能を有するものと推測される。出土遺物から18世紀後半~19世紀初頭の溝群である。

SD 11101は近世陶磁器(83・84)、土師器鍋(82)や鉄製品包丁(85)のような供膳具・煮炊具・調理具類等日常雑器が出土し、おそらく東側にあった屋敷地を囲う溝と見られる。

それに比してSD 11103・11305の出土遺物は少ない。SD 11305は東側肩に幅0.5~0.8mの犬走り状平坦面を持ち、溝の西肩寄りに幅0.5mでより深くなるが、これは別遺構の可能性がある。出土遺物の少なさは屋敷中心部から離れているためか。

SD 11112 第193次調査地から延び、本調査区で西に90°屈曲する。溝の西・北の壁面はほぼ垂直にな

り、東・南に向かってなだらかに立ち上がる断面形状を呈することから、板塀状の遮蔽施設の可能性がある。出土遺物には土師器焙烙片があるが、全体的に少ない。検出時にSD 11305よりも新しいことを確認している。

SK 11315 東西2.2m・南北2m、検出面からの深さ0.6mの土坑である。椀や皿、徳利等の供膳具に加え、焙烙・行平鍋等の煮炊具、複数の紅皿等19世紀初頭の良好な一括資料が出土した。調査区の南150mを通る伊勢街道との関わりが想起される。

SK 11309 SK 11315とほぼ同時期と考えられるが、遺物は非常に少ない。

(6) その他

SD 11106 飛鳥時代の溝SD 11107の西で、0.7~1.0mの距離を隔てて並走する溝である。SD 11107と同様に縦断方向に半截したが、SD 11107のような柱状の落ち込みは確認できず、溝自体も検出面からの深さが15cmと浅い。出土遺物は弥生土器の壺底部や甕口縁片などの細片のみで、第193次調査地での重複関係から弥生時代以降、近世までの溝と考えられる。

遺構名	調査時遺構名	グリッド	長軸	短軸	深さ(検出面から)	完掘・未掘	埋土	時期	出土遺物	備考
SD6960	溝	1 g11・h11・i11・j11・g12・h12	東西8.6m 南北4.6m	幅0.5~0.8m	14cm	完掘	B	奈良	土師器皿・壺、須恵器杯蓋	第100次からの続き
SK11295	土坑	2 h11・i11	1.5m	0.7m	5.5cm	未掘	C	~古墳	土師器壺片1片のみ	
SD11101	溝	3 i7~12・h12	20.2m	幅0.84~1.4m	17.7~17.5cm	完掘	C	近世 (19世紀初)	弥生土器、円面硯、陶磁器・瓦、土師器鍋・倍烙、鉄製品包丁	第193次からの続き 円礫混り
SK11296	溝	4 i10	0.8m	幅0.4m	5.5cm	未掘	A	古墳~奈良	土師器壺片	
SD11297	溝	5 g9・h9・g10・h10	3.7m	幅0.95m	0.6m	半截	A	飛鳥	弥生土器壺、土師器杯・壺・高杯、須恵器杯蓋、土馬、剥片	
SD11298	溝	6 i12・j12	2.2m	幅0.3~0.45m	4cm	完掘	D	飛鳥・奈良	土師器杯片	出土量少ない
SK11299	土坑	7 i8・i9	2.2m	0.8m	22cm	一部完掘	C	近世~	須恵器壺片、土師器鍋片、陶器片	
SD11112	溝	8 i7・i8・i9・g8・g9・h9	東西8.4m 南北5.6m	幅0.3~0.65m	15~22cm	完掘	C	少し赤い 近世	青磁、弥生土器、土師器倍烙、	板塀状遮蔽施設か
SK11301	溝	9 j8	1.6m	1.2m	23cm	一部半截	A	古墳~古代	剣形石製模造品、土師器高杯・壺体部片	
SK11302	溝	11 j8・j9	2.2m以上	1.84m	9cm	未掘	A	古墳	土師器高杯脚部・壺体部	土坑
SD11103	溝	13 g7~11・h7~12	12.6m	58~71cm	9~22cm	一部完掘	C	近世	土師器鍋、弥生壺底、須恵器壺・壺、近世陶器	
SZ11303	溝	14 i8・j8・i9・j9	5m以上	1.9m以上	4~6.5cm	未掘	A	弥生	弥生細頸壺	東周溝調査区外 北周溝なし
SK11114	土坑	18 h・i7・8	2.43m	2m	15cm	未掘	A	弥生~	弥生土器、土師器壺体部片・杯片、中世土師器小皿片	第193次からの続き 長軸は第193次と合わせて
SZ11304	溝	20 h8・9	8.2m	5.9m	20cm	未掘	A	弥生	弥生土器、壺、環状石斧、須恵器杯蓋	西周溝なし
SD11108	土坑	21 h7	1m	0.6m	13cm	未掘	C	古代~	土師器壺体部片、中世土師器鍋体部片	
SK11111	溝	22 h7	1.7m	1m	7.5cm	未掘	C	奈良?	弥生土器壺口縁部片	193次では土坑
SD11305	溝	24 g7~12	20.4m	幅0.35~2m	18~30cm	完掘	C	近世	弥生(突帯)、土師器皿・ミニチュア?、須恵器壺・壺、近世陶器、ロクロ土師器	
SK11306	土坑	26 g・h12	2.1m	1.76m	10cm	未掘	A	古代~	古代土師器体部片	
SZ11307	溝	27 h8	5.2m	6m	5.5cm	未掘	A	弥生	弥生土器壺?細片	拡張前の周溝溝か
SK11308	土坑	31 f11	1.65m	1m以上	4cm	未掘	A	弥生	弥生土器、土師器壺?片	
SK11309	土坑	32 f10	1.7m	1.5m	0.83m	完掘	D	少砂利混 近世	土師器皿、石硯	
SD11106	溝	33 g7・8	2.7m以上	幅0.52~0.6m	18~30cm	半截	A	弥生~	弥生土器壺底・壺片・壺口縁	飛鳥時代か
SK11311	土坑	34 f11	1.1m	1.1m	49cm	完掘	C	中近世~	古代土師器片、中世土師器皿片、	一部クラク
SD6299	溝	35 d・f12	9.4m	幅0.55~0.9m	8~22cm	完掘	C	中世~	弥生土器、須恵器片、平安土師器、古代土師器片、ロクロ土師器、緑釉陶器段皿、土師器小皿・鍋片	第85-8次からの続き
SK11312	土坑	36 g11・12	2.2m	1.5m	9cm	未掘	A	弥生?	弥生土器(土師器?)細片	
SK11313	土坑	37 f9・10	1.45m	0.8m	11.5cm	未掘	C	古代~	弥生土器片、土師器壺片	
SD11314	溝	38 g11・12	5.6m	幅0.7~0.85m	34.5cm	半截	D	古代	弥生土器壺片、土師器杯口縁部片	SB11339布掘り溝
SK11315	土坑	41 f9	2.2m	1.9m	0.62m	完掘	D	近世 (19世紀前半)	近世陶磁器、土師器、土製品、金属製品、石製品、瓦	近世遺物一括廃棄土坑
SD11316	溝	42 f11・f12・e12	8.4m	幅0.75m	7cm	未掘	D	古代	弥生土器片、古代土師器片、近世陶器、山茶碗、寛永通宝	SB11339布掘り溝
SK11317	土坑	43 e11	2.1m	0.85m	8.5cm	未掘	C	古代~	弥生土器片、土師器壺片	
SK11318	土坑	44 f10	1.5m	0.7m	2cm	未掘	C	古代~	鉄滓、土師器片	
SK11319	土坑	45 g10	1.4m	0.9m	12cm	完掘	D	中世~	弥生土器片、須恵器壺片、精製土師器片、中世土師器片、鉄滓	
SI11321	土坑	46 e・f12	5.2m	3.9m	28cm	未掘	A	古墳	弥生土器壺・壺、土師器高杯、須恵器壺	東カマド、煙道あり
SK11322	土坑	47 e8・9	3m	1.65m	10cm	未掘	C	中世	土師器鍋・皿、陶器椀(山茶椀)	
SD11323	溝	50 e・f10~12	5.9m	0.82m	0.65~0.73m	半截	A	飛鳥	弥生壺・壺が大半、須恵器壺体部片、土師器杯片・高杯脚部片	柱痕跡2か所
SK11338	土坑	51 f9	2.4m	0.8m	5cm	未掘	A	古代?	土師器杯	
SE11325	土坑	52 f8	2.15m	1.1m	0.99m	未掘	C	礫混 中世 (14世紀代)	土師器鍋・皿、須恵器壺?	素掘り井戸か
SK11326	土坑	53 e・f9・10	2.8m	2.5m	21cm	未掘	D	弥生	弥生土器壺・壺、サヌカイト剥片	

第Ⅱ-1表 第197次調査 遺構一覧1

遺構名	調査時遺構名	グリッド	長軸	短軸	深さ(検出面から)	完掘・未掘	埋土	時期	出土遺物	備考
SK11327	土坑	54 g・h11	3m	1.5m	0.51m	完掘	C		弥生土器片、須恵器杯?(摩耗大)、精製土器器杯片	
SD11328	溝	56 g10	1.15m	35cm	18.5cm	未掘	C	古代～	土器器細片(古代～)	近世か
SK11329	土坑	58 f10	2.4m	2.1m	42cm	一部半掘	A	弥生	弥生土器壺片、精製土器器片、鉄製品	
SK11331	土坑	61 e11	1.6m	0.8m	42cm	半掘	C	古代～	須恵器杯	
SD11107	溝	62 g・h7・8	3.9m	幅0.45～0.75m	29cm	半掘	A	飛鳥	弥生土器(凹線文)・壺、土器器	柱痕跡2か所
SK11333	土坑	65 f12	1.35m	0.8m	2cm	未掘	A	古墳～	土器器壺片	竪穴建物の可能性あり
SK11334	土坑	66 e・f8・9	1.5m	0.75m	10cm	未掘	AかD	弥生～	弥生土器片	
SK11335	土坑	67 e・f8	1.85m	1.8m	14cm	未掘	A	古墳	土器器高杯	
SK11336	溝	68 i8	2.6m	1m	32.5cm	一部完掘	A	古代	土器器杯口縁片1片のみ	
SD11337	溝	69 d10・11	4m	0.8m	25cm	半掘	A	古代～	弥生土器片、土器器壺体片	
SD11324	溝	71 e11・12	1.3m以上	幅0.85～1m	0.55m	半掘	A	飛鳥	弥生土器壺片、土器器(弥生?古墳?)高杯、	柱痕跡1か所
SK11332	土坑	73 h・i 11・12	2.6m以上	1.2m	4cm	未掘	A	弥生	弥生土器壺・壺	
SK11346	土坑	74 h・i 9・10	3.4m	1.5m	4cm	未掘	A	弥生	なし	

埋土 A:黒 B:白粘土混 C:薄茶 D:黄ブロック混

第Ⅱ-2表 第197次調査 遺構一覧2

遺構名	調査時遺構名	時期	建物平面規模		建物面積(m ²)	柱間寸法(m)	柱穴平面規模		柱底深さ(m) 検出面から(標高)	柱抜取穴	布掘り	方向	建物軸	備考
			柱間(間)	桁行(m) 梁行(m)			柱穴掘方(m)	柱痕跡(直径m)						
SA11120	柱列2	飛鳥	3+	8.2+	-	2.2/2.4/2.5	0.6～1.0	0.18	0.4～0.6 (12.7～13.1)	×	×	東西	N33° E	SA11300の建替え
SA11300	柱列2	飛鳥	2+	5.6+	-	2.4/2.4	0.7～0.9	未確認	0.4～0.55 (12.8～12.9)	?	×	東西	N33° E	SA11120より古 旧SA11120(概報H30)
SA11310	柱列2	飛鳥	10 3+	22.6 6.2+	-	2.4/2.3/2.4/2.1 /2.1/2.1/2.4/2.2 2/2.4/2.2/ 2.0/2.1/2.1	0.6～1.2	0.14	0.35～0.55 (12.7～13.3)	×	×	南北	N33° E	拡張後の南北方向塀 SB11330を伴う 旧SA11120(概報H30)
SB11320	門1	飛鳥	1 2	3.1 3.0	9.3	3.1 1.5/1.5	1.0～1.2	0.18	0.55 (13.0～13.1)	○	×	東西	N33° E	建替え前 SB11110と対応
SB11330	門2	飛鳥	1 2	3.1 2.6	8.1	3.1 1.3/1.3	0.6～1.0	0.18	0.6～0.7 (12.8～12.9)	×	×	東西	N33° E	建替え後 SA11310に取り付く
SB11110	掘立柱建物1	飛鳥	6 2	13.5 5.0	67.0	2.2/2.3/2.1/2.3 /2.3/2.3 2.5/2.5	0.85～1.2	0.2	0.4～0.5 (13.0～13.2)	○	×	南北	N33° E	
SB11339	掘立柱建物2	飛鳥	3+ 2	7.2+ 4.7	36+	1.6/1.7 2.5/2.5	-	0.2	0.7 (12.9)	○	○	南北	N33° E	第189次SB11015との対 応が不明のため別番号を 付与
SB11340	掘立柱建物3	飛鳥	4+ 2	8.2+ 5	41+	1.9/1.6/1.9 2.5/2.5	0.7～1.3	0.2	0.35～0.7 (12.9～13.2)	○	×	南北	N33° E	
SB11341		飛鳥	3 2+	5.8 3.3+	20.5+	2.2/1.8/1.8 1.6/1.7	0.5～0.7	0.3	未確認	×	×		N33° E	総柱建物
SA9093		奈良	19+	44.5	-	2.1/2.4	0.6～0.8	0.2	0.45 (13.2)	○	×	東西	N1° E	最初の塀 SA11018と対応
SA11018		奈良	7+	16.5+	-	2.6	0.4～0.8	0.2	0.45 (13.2)	○	×	南北	N1° E	最初の塀 SA9093と対応
SA6943		奈良	13+	32+	-	2.7/2.4/2.3	0.45～0.8	0.18	0.6 (13.0)	○	×	東西	N1° E	1回目建替えの塀 SA11343と対応
SA11343		奈良	7+	16.5+	-	2.1	0.45～0.6	0.18	0.6 (13.0)	×	×	南北	N1° E	1回目建替えの塀 SA6943と対応
SA9094		奈良	21+	46+	-	2.4/2.1/2.1	0.4～0.8	0.15	0.4 (13.2)	×	×	東西	N1° E	2回目建替えの塀 SA11344と対応
SA11344		奈良	7+	16.5+	-	2.1	0.7～0.8	0.15	0.4 (13.2)	×	×	南北	N1° E	2回目建替えの塀 SA9094と対応
SB11342		奈良	7 2	14.3 5	14.4 5	2.2/2.0/2.1/2.0 /2.0/2.1/2.0 2.5/2.5	0.6～0.8	0.15	0.4～0.6 (13.1～12.9)	○	×	東西	N1° W	最初の建物 SA11124一部(概報H30)
SB11345		奈良	4 2	8.2 5	8.2 5	2.1/1.9/2.0/2.2 2.5/2.5	0.5～0.75	0.15	0.55 (13.0)	○	×	東西	N1° W	SB11342に重複する建物 SA11125一部(概報H30)
SB6950		奈良	5 2	13.3+ 4.8	63.8+	2.3/ 2.4/2.4	0.9～1.1	0.3	0.32 (13.25)	○	×	南北	N3° W	第189次のSA11016・ 11017と対応

第Ⅱ-3表 第197次調査 掘立柱塀・門・掘立柱建物一覧

4 遺物

遺物整理用コンテナ73箱分の遺物が出土した。時代毎に分けて遺構毎に、遺物包含層は地区毎（北西f7→南東i12）に分けて詳述する。遺構出土遺物は、本来の遺構の年代とは異なる遺物についても調査区の遺物の状況を示すため、煩雑ではあるがまとめて掲載している。なお、ここでは特徴的な遺物のみ記述する。詳細は第Ⅱ－4～6表に記載した。

（1）弥生時代遺構出土遺物【第Ⅱ－19図】

S Z 11304 出土遺物（1・2） 1は環状石斧である。断面形は裏面が平坦、表面はやや傾斜する台形状で、丁寧に磨かれている。表面にキザミが2か所（1か所は図上部のワレ部分に残る）施される。刃部となる周縁部は人為的に打ち欠く。2の須恵器杯蓋は重複する遺構の混入と考えられる。

S Z 11303 出土遺物（3） 周溝から横位で出土した（第Ⅱ－6図）。口縁部と体部下半に焼成後の打ち欠き・穿孔が見られる。また、体部上半に2条の重弧文が2か所確認できる。

S K 11326 出土遺物（4～14） 4～6、8～11は弥生時代前期後葉、12・13は弥生時代中葉の遺物である。

S K 11332 出土遺物（16・17） 17は弥生土器細頸壺で、口縁部は完形だが体部下半は4分の1残存、底部は欠損し、底部打ち欠きの可能性がある。焼成後の穿孔等は確認できない。

S K 11336 出土遺物（18） 古代の土師器杯である。S K 11336にはS B 11110・11342・11345が重複することから、それらの遺構の混入であると考えられる。

（2）古墳時代遺構出土遺物【第Ⅱ－19図】

S I 11321 出土遺物（19～25） 22は比較的大型に復元できる土師器椀である。23・24は土師器高杯で、24は辻編年⁽¹⁾4段階のものか。25は須恵器壺頸部で波状文を3段施す。

S K 11335 出土遺物（26） 土師器椀形高杯で、杯部と脚部の4分の3が残存する。辻編年4段階、陶邑編年のTK 23～47型式の所産と考えられる。

S K 11301 出土遺物（27） 剣形の石製模造品で、表面は多方向（上方斜め→縦→下方斜め）の順に研磨かの研磨痕が残り、裏面はほぼ一方向、上・両側面も

一方向の研磨痕が確認できる。穿孔は主に表面から施し、補助的に裏面からも穿孔した痕跡が見られる。緑色片岩製と思われる⁽²⁾。

（3）飛鳥時代遺構出土遺物【第Ⅱ－20図】

S B 11320 出土遺物（28） 土師器甔の口縁部片である。細片のため全体形状・所属時期は不明である。

S D 11297 出土遺物（29～35） 29・30は弥生土器片である。30は壺口縁の内面に突帯を持つ内面突帯B類⁽³⁾である。31はサヌカイト剥片で、一部を打ち欠き刃部を作り出している。32は須恵器杯H蓋であり、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期⁽⁴⁾と考えられる。33・34は土師器杯でいずれも飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられる、34は33に比して焼成が堅緻である。

S B 11110 出土遺物（36～40） 36は柱穴8掘方埋土から出土した縄文時代晩期の縄文土器である。37・38は柱穴3掘方埋土からの出土で、37は土師器鉢（椀）で、古墳時代中期、TK 208型式のもの、38の土師器甔は同じく古墳時代中期の所産と考えられる。39・40は柱穴1出土で、いずれも柱抜取穴から出土している。39は古墳時代中期の土師器甔口縁部、40は土師器杯で、斎宮Ⅰ－1期と考えられる。

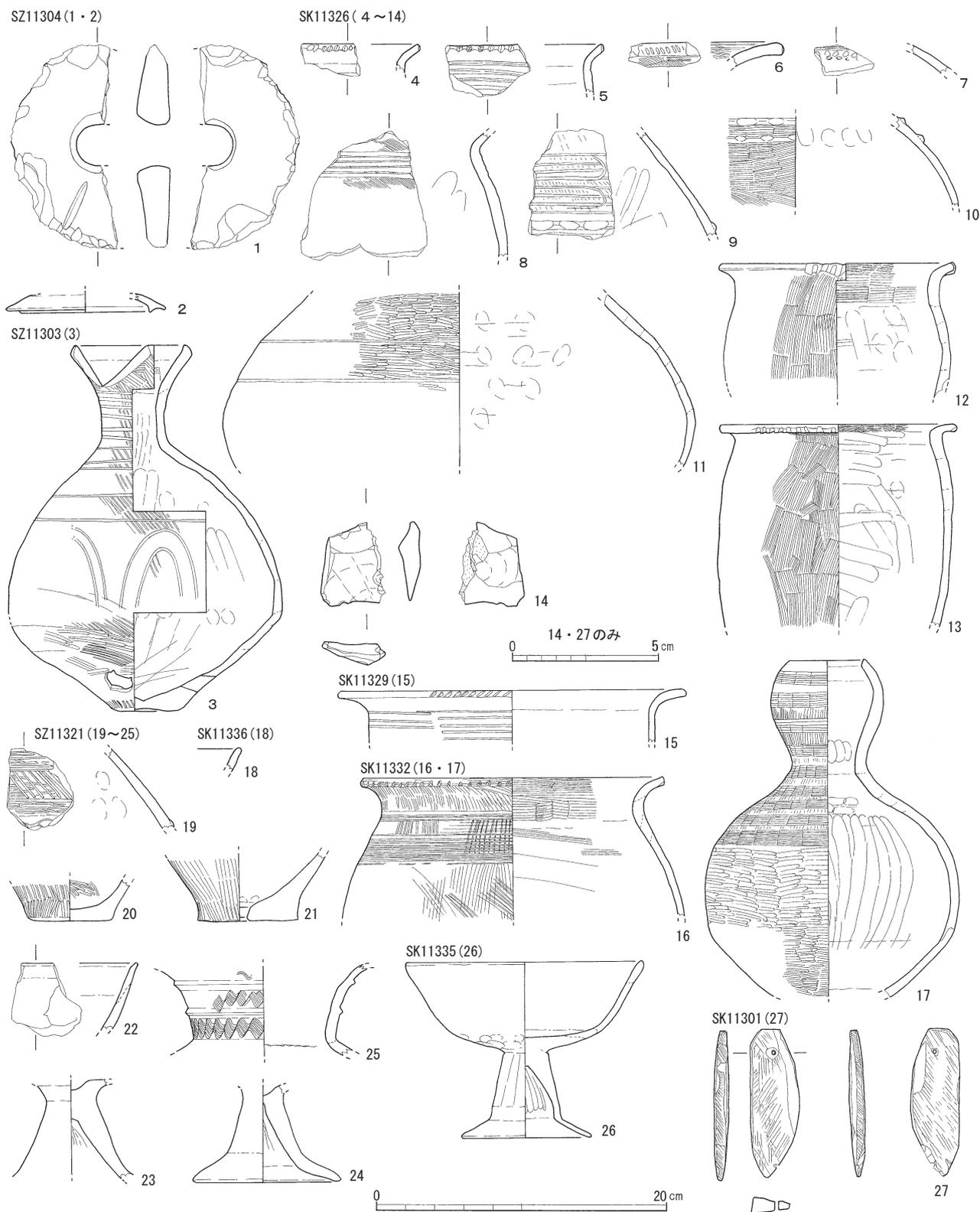
S D 11106 出土遺物（41） 弥生時代中期の弥生土器甔口縁部細片である。

S D 11323 出土遺物（42～44） 43は土師器高杯脚部で、TK 47～MT 15型式のものと思われる。S I 11321遺物の混入だろうか。44は土師器杯と思われる。口縁部下に横方向のミガキが見られ、細片のため判断し辛いが飛鳥Ⅲ～Ⅳ期か。

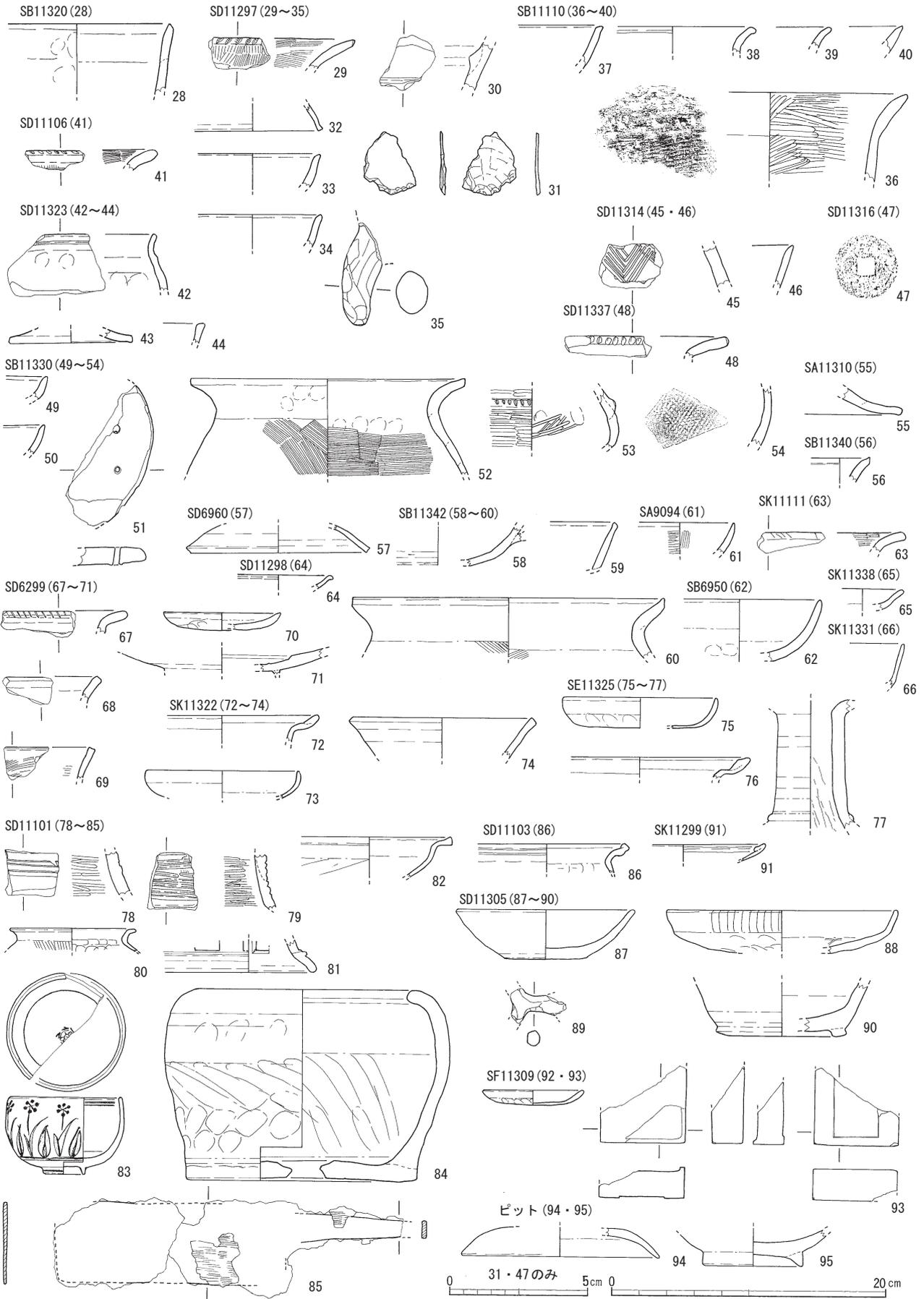
S D 11314 出土遺物（45・46） 46は土師器杯の口縁部片である、表面が磨滅著しい。斎宮Ⅰ－1期古段階、飛鳥Ⅳ期のものと考えられる。

S B 11330 出土遺物（49～54） 49～51は柱穴7掘方、52は柱穴8柱痕跡、53は柱穴9掘方、54は柱痕跡からの出土である。49・50は土師器杯でいずれも飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられ、S B 11330構築の上限を示す遺物である。52は土師器甔で、体部径が口縁部径よりやや大きくなる形状であろう。斎宮Ⅰ－1期、7世紀後葉～8世紀初頭のものである⁽⁵⁾。柱痕跡出土であることから、廃絶時期を示すと考えられる。54は須恵器の壺もしくは甔体部と考えられる。

S A 11310 出土遺物（55） 柱穴6掘方出土で、古墳



第Ⅱ-19図 第197次調査 出土遺物実測図1<遺構> (14・27は1:2 その他は1:4)



第Ⅱ-20図 第197次調査 出土遺物実測図2<遺構> (31・47は1:2 その他は1:4)

時代中期の土師器高杯脚部片である。

S B 11340 出土遺物 (56) 柱抜取穴から出土した土師器甕口縁部片で、口縁上端部が肥厚する。7世紀後葉～8世紀初頭の範疇に収まるか。

(4) 奈良時代遺構出土遺物【第Ⅱ-20図】

S D 6960 出土遺物 (57) 須恵器杯蓋で、斎宮Ⅰ-1期、飛鳥Ⅴ(平城Ⅰ)期か。

S B 11342・11345 出土遺物 (58~60) 58・59はS B 11342の柱穴4から出土した。58は柱掘方出土で、須恵器無蓋高杯の杯部と思われ、把手の一部が残存する。杯底部外面には直線の線刻が見られるが、これは脚部に施した方形透かしを開ける際についた工具痕と思われる。59は柱抜取穴からの出土で、土師器杯Aの口縁部片である。斎宮Ⅱ-1期の所産と考えられこの建物の廃絶年代の上限を示す。60は柱穴12出土であり、斎宮Ⅰ-2期と考えられる。

S A 9094 出土遺物 (61) 柱掘方出土の土師器杯口縁部である。外面は横方向ミガキ、内面は縦方向ミガキを施す。斎宮Ⅰ-2期と思われる。構築年代の上限を示す。

S B 6950 出土遺物 (62) 柱抜取穴から出土した土師器碗である。斎宮Ⅰ-2期で、廃絶年代の上限を示す。

(5) 平安時代～鎌倉時代遺構出土遺物【第Ⅱ-20図】

S D 11298 出土遺物 (64) 斎宮Ⅱ-3期、9世紀後半代の土師器皿と考えられる。

S K 11338 出土遺物 (65) 土師器杯である。斎宮Ⅱ-3期中段階と思われる。

S K 11331 出土遺物 (66) 須恵器杯Gで、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期である。

S D 6299 出土遺物 (67~71) 70は土師器小皿である。斎宮Ⅲ-3期かと思われる。71は緑釉陶器段皿で、斎宮Ⅱ-3期と考えられる。

S K 11322 出土遺物 (72~74) 72・73は南伊勢系土師器である。72は伊藤編年⁽⁶⁾第一段階、13世紀前～中葉、73は斎宮Ⅳ-3期、13世紀後葉のものである。74は知多産陶器碗⁽⁷⁾で6型式、13世紀後半代のものである。

S E 11325 出土遺物 (75~77) いずれも南伊勢系土師器で、75は斎宮Ⅳ-3期新段階、13世紀後半、76は伊藤編年第2段階、14世紀前半代のものである。

S D 11101 出土遺物 (78~85) 80は土師器甕で古墳時代後期のものか。81は円面硯の脚端部で長方形の透かしを持つ。84は陶器鉢で上半に鉄釉を施す。底部は焼成後穿孔を施され、植木鉢として転用されたものか。85は鉄製包丁である。柄部、刃部ともに木質が付着している。

S D 11305 出土遺物 (87~90) 87はロクロ土師器で斎宮Ⅲ-3期か。88は土師器皿で、口縁部外面に線刻が少なくとも残存部では全体に薄く施される。斎宮Ⅲ-2期。89は不明土製品だが、現段階ではミニチュア甕の蒸気孔部と考える。

S K 11299 出土遺物 (91) 小型の土師器焙烙と思われる。非常に薄く焼成堅緻である。

S K 11309 出土遺物 (92・93) 93は石硯である。全体的に丁寧に研磨されている。

ピット出土遺物 (94・95) 94は土師器杯B蓋である。全体的に摩滅著しく、調整等は不明である。斎宮Ⅰ-2期新段階～3期古段階のものか。95は渥美産無釉陶器碗である。12世紀末～13世紀前半のもの。

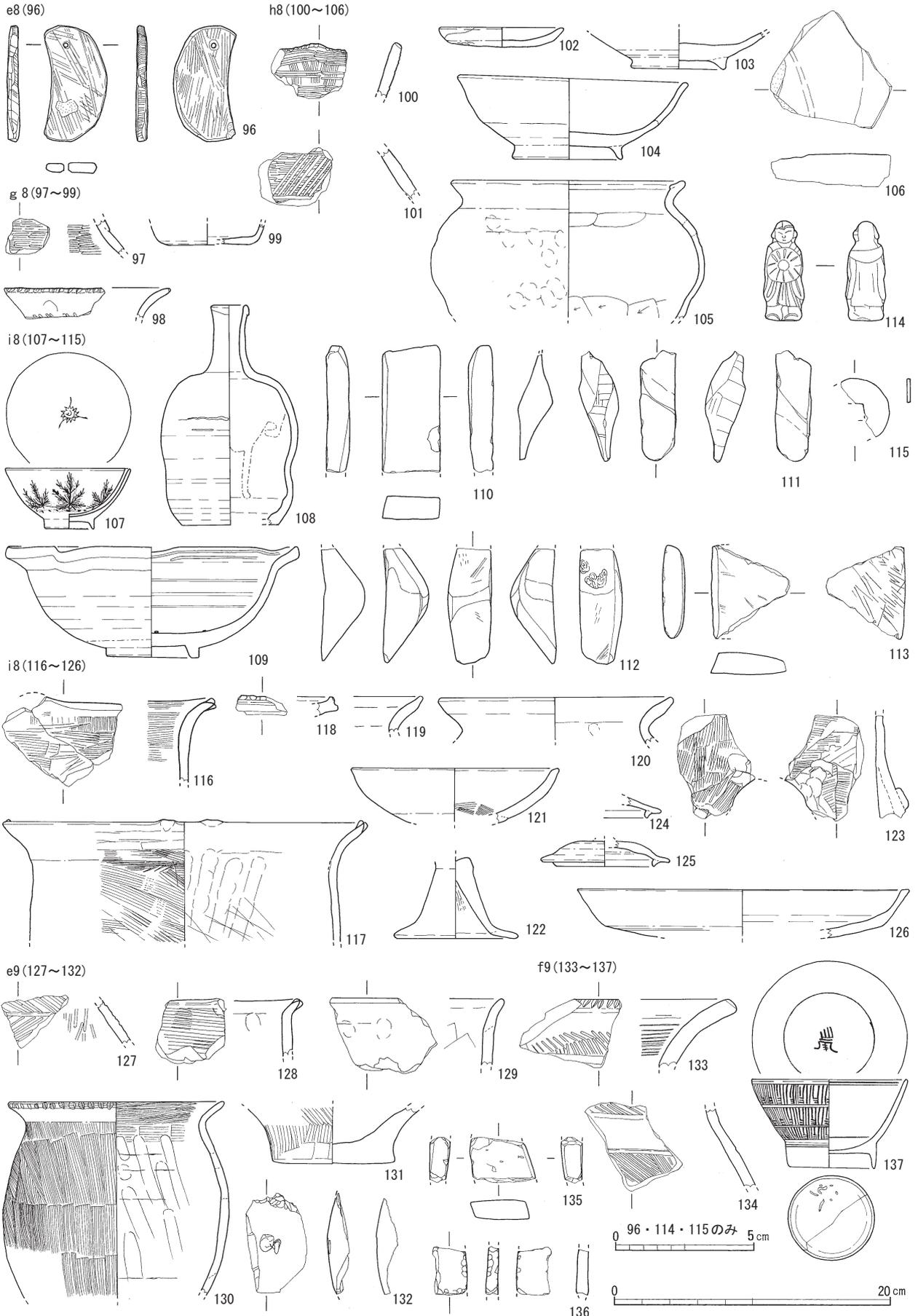
(6) 遺物包含層出土遺物【第Ⅱ-21・22図】

e 8 出土遺物 (96) 勾玉形の石製模造品である。表裏面に研磨による線状痕が残る。側面には、刀子による加工痕の後研磨を行った痕跡があり、内湾部では刀子加工痕が明瞭である。穿孔は片側から行われている。石材調査は行っていないが、蛇紋岩製の可能性がある。5世紀後葉の所産か。

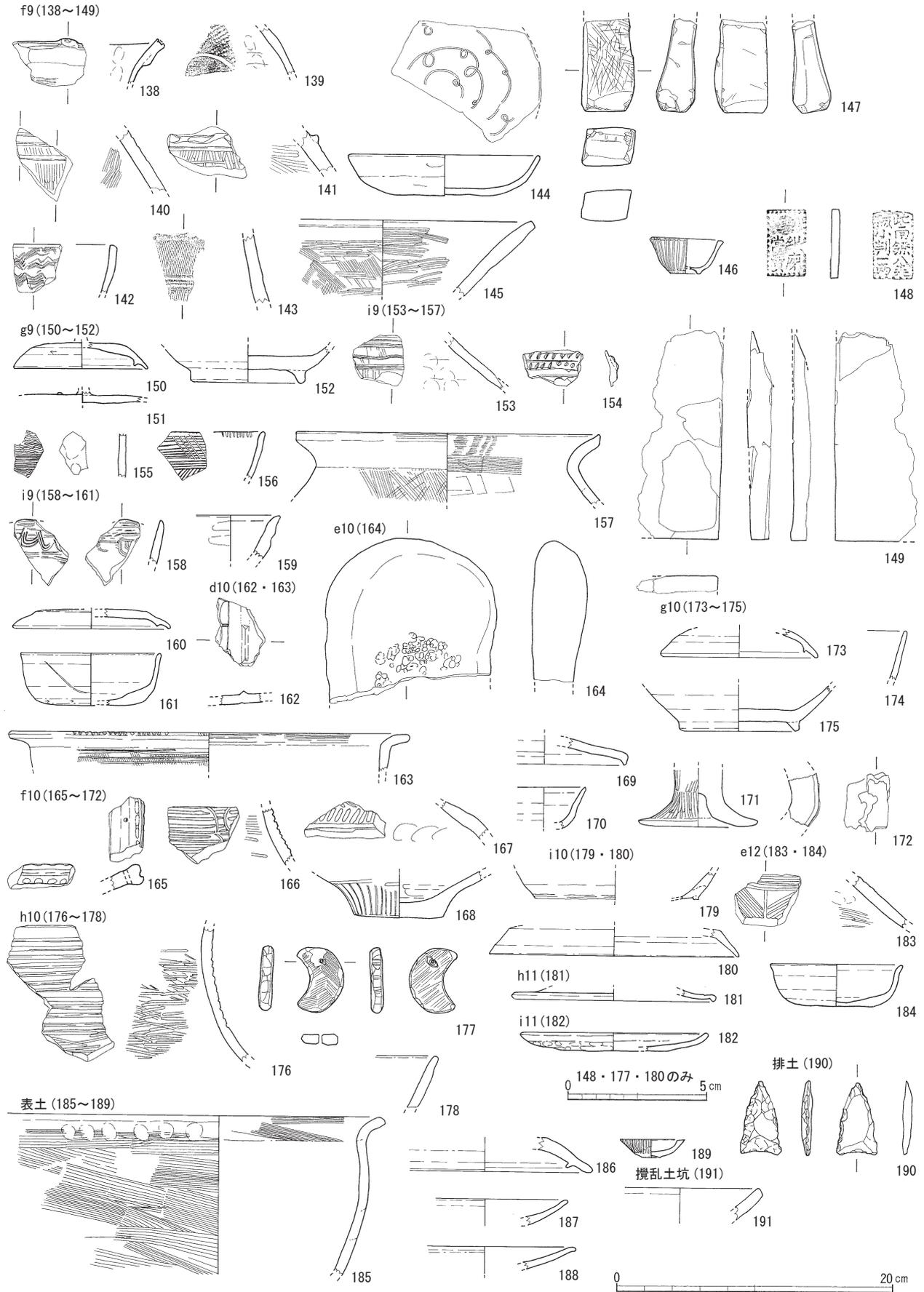
g 8 出土遺物 (97~99) 99は須恵器杯G底部である。斎宮Ⅰ-1期、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。

h 8 出土遺物 (100~106) 100は弥生土器壺で、口縁部は突起し、口縁端部にキザミを施し、外面にはハケ後凹線を施す。102は土師器小皿、103・104はロクロ土師器碗で斎宮Ⅲ-2期、11世紀中葉。105は土師器鍋で13世紀代と平安時代後半から末の資料である。102~105は一括で出土したもので、この地点に当該時期の遺構がある可能性があるが、遺構が多く重複し不明である。

i 8 出土遺物 (107~115) 107は肥前系磁器で19世紀前半のもの、109は瀬戸産の陶器鉢で類似するものがS K 11315から出土している。110~113は砥石である。113は瓦質で、瓦を砥石に転用したものである。114は地藏形のどろめんこ、115の銭貨は



第Ⅱ-21図 第197次調査 出土遺物実測図3 <包含層> (96・114・115は1:2 その他は1:4)



第Ⅱ-22図 第197次調査 出土遺物実測図4 <包含層その他> (148・177・180は1:2 その他は1:4)

脆弱で表面が剥離しており、種類は不明である。

j 8 出土遺物 (116~126) 116・118は弥生土器甕で、どちらも口縁部に突起を持つ。119・120は土師器甕で斎宮Ⅰ-1期相当⁽⁸⁾、121は椀形高杯の杯部で辻編年第4段階TK 208~47型式、123は土師器移動式カマドで、下半に突起を持つが、斎宮跡第86次調査に類似するものがあり、斎宮Ⅱ-1期古段階の遺物が共伴する⁽⁹⁾。124・125は須恵器杯G蓋で飛鳥Ⅲ~Ⅳ期である。126の須恵器皿Aは焼成不良で軟質である。斎宮Ⅰ-2期か。

e 9 出土遺物 (127~132) 128は弥生土器甕で口縁端部に突起を持つ。130の弥生土器甕は口縁端部にキザミを施す。

f 9 出土遺物 (133~149) f 9には多量の陶磁器が出土したSK 11315や弥生土器が出土したSK 11326があるため、弥生土器、近世遺物が多い。

137は肥前系磁器の広東碗である。見込みに染付で「壽」とある。また、ガラス質の焼き継ぎが施され、高台部には発注元を示すと思われる印が焼き継ぎに用いたガラス質で施される。138は縄文土器浅鉢と思われる。胎土は緻密で表面は一部ミガキで丁寧仕上げられている。中期のものと思われ、他地域からの搬入品と見られる。142は弥生土器小型鉢である。表面に櫛描による波状文を施す。143は須恵器器台片と思われ、硬質な焼きである。144は土師器杯で斎宮Ⅰ-3期である。145は土師器盤で平城Ⅱ期のものと思われる。146は磁器紅皿である。今回の調査では紅皿が複数点出土しているが、いずれも189のような浅いものであり、深いものは146のみである。148は南鐐二朱銀を模した土製品である。二朱銀は「銀座常是」「以南鐐八片換 小判一兩」と刻むが、本作は異体字を使用する。149は石硯である。残存部が少ないが、表裏面とも硯面として使用していたようである。

i 9 出土遺物 (153~157) 154は弥生土器手焙形土器。155は弥生土器鉢の破片と思われる。156は古墳時代前期の瓢壺で口縁端部に表面と上部からキザミを、表面に櫛描直線文を施す。表面を赤彩する。

j 9 出土遺物 (158~161) 158は弥生土器小型壺片である。口縁部は弧状を呈し、内外面に櫛描文を施す。159は土師器椀である。外面に強いユビナデの

痕跡が見られる。古墳時代中期のものか。160は須恵器杯G蓋で、飛鳥Ⅲ~Ⅳ期の所産である。161は外面にヘラ描きが見られる。

d 10 出土遺物 (162・163) 162は弥生土器壺口縁部で、内面に突帯とその内側に凹線が1条、突帯の反対側、外面に凹線が一条施される。

f 10 出土遺物 (165~172) 165は弥生土器壺である、口縁部に直径0.2cm程の紐孔が開く。171は土師器高杯脚部で、飛鳥Ⅲ~Ⅳ期と考えられる。

g 10 出土遺物 (173~175) 173は須恵器杯蓋で飛鳥Ⅲ期、174は須恵器杯Gである。

h 10 出土遺物 (176~178) 176は弥生土器壺頸部片である。内外面ともミガキを施し、外面には凹線を施す。177は勾玉形石製模造品である。表裏面とも研磨痕が確認できる。側面は刀子による加工痕が明瞭である。また、孔は裏面、図の下面から穿孔する(片側穿孔)。表面は穿孔により孔の周囲が剥離する。使用石材は調査を行っていないが、絹雲母岩、滑石片岩、もしくはシルト岩と指摘される。178は土師器杯片で斎宮Ⅰ-2期である。

i 10 出土遺物 (179・180) 179は土師器有稜(有段)高杯杯部で辻編年4段階、TK 208~47型式と思われる。180は須恵器杯蓋で飛鳥Ⅲ~Ⅳ期か。

(7) その他

表土出土遺物 (185~189) 表土からの遺物はさほど多くない。185は弥生土器甕で、表面に煤が多く付着する。186は須恵器杯蓋で、飛鳥Ⅲ期である。187・188は緑釉陶器皿である。189は磁器紅皿である。

排土遺物 (190) 調査にあたっては、表土掘削土と包含層掘削土は調査区の西と東に分けて残置しており、190は包含層掘削土から出土したものである。石鏃で、サヌカイト製と思われる。全体に風化著しい。

攪乱土坑出土遺物 (191) e 10の攪乱土坑から出土した弥生土器壺口縁部で、前期の所産である。

5 まとめ

(1) 古墳時代石製模造品

今回の調査では、斎宮跡としては初めて石製模造品が、しかも3点出土した。既にみたように、7世紀以降の遺構が集中するにも関わらず3点もの石製

模造品が出土することから、周辺ではより多くの模造品が使用されていた可能性も考えられる。

今回出土した石製模造品はその特徴から、5世紀中葉～6世紀初頭、古墳時代中後期のものと考えられる。この時期の遺構は第193次調査では確認されていないが、第197次調査ではS I 11321のほか土坑2基があり、S K 11335からは土師器高杯(26)が、S K 11301では剣形石製模造品(27)が出土している。遺物は第193次調査で包含層から土師器高杯が2点、第197次調査でも包含層から土師器高杯が図化したのは2点、図化していないが、脚部破片が10数個体分出土しており、特にS K 11301のあるi 9区で多いようである。それに対し、カマドを伴うS I 11321があるものの、供膳具である杯類や、貯蔵具や煮炊具は少数である。

齋宮周辺地域の石製模造品について集成・検討がなされていないため、齋宮跡におけるその意義について検討を加えることはできない。そこで既に指摘されている土師器高杯の重要性を再掲する。近辺、齋宮跡の西に位置する松阪市中の坊遺跡では4世紀後葉頃の竪穴建物から土師器高杯が、宮川下流域の伊勢市高ノ御前遺跡では5世紀後葉の竪穴建物から土師器高杯が多く出土することから、土師器高杯の出土は祭祀の執行を現す可能性がある。齋宮段丘低縁部ではそれに石製模造品を合わせた祭祀が想起され、「視点場として眺望はよく、視認性にも優れ、祭祀空間であった公算が高い」⁽¹⁰⁾という指摘を否定する要素は、今回の調査では見当たらない。

(2) 飛鳥時代中枢域の構造

四脚門、脇殿相当の長舎の建物、その西側で確認した溝の存在は、飛鳥時代区画の構造を明らかにするとともに、新たな課題も浮かび上がらせた。今回の調査で得られた遺構の状況を整理する。

① 飛鳥時代遺構の変遷(第Ⅱ-23図)

門・掘立柱建物に2段階あることから、各段階の遺構について整理する。

第1段階：掘立柱建物を塙とする段階

第193次調査で検出した区画北辺塙S A 11120の最も東の柱穴は柱穴の重複がなく、東から2つ目から西は重複がある。また、東から2つ目の柱はS B 11110の東側柱・S B 11320の中央柱と筋が通ること

から、北辺はS A 11120を区画塙として、東辺はS B 11110・11329を区画施設とした。S A 11120とS B 11110との間には空間が空き、柱と考えられるようなピットがあるが、柱間も均等ではなく、確定はできない。

南の建物S B 11329は布掘り、S B 11110は壺掘りと工法が異なり、柱筋も東へ0.4mずれるが、S B 11329は第1段階の建物とする。

第2段階：東側に掘立柱塙を新築する段階

S A 11120を1間分(約2.5m)東へ拡張し、そこから南へ延びるS A 11310が造られ、門S B 11330が取り付く段階である。S B 11110は建替えが見られないが、この段階も存続したと仮定する。

S B 11340はS B 11339から北に0.9m、西に0.2mずれて建てられる。S B 11330からの距離はS B 11110と対称とはならず、区画が2.5m東へ拡張されたことにより、北へ建物がずれたとしても屋根が干渉しない。また、第1段階よりもS B 11110とS B 11340の東側柱筋は揃う。

以上は、門と掘立柱建物の建替えから考えられる区分である。平成30年度に実施した第195次調査では4段階に分けられる倉庫群を確認したが、今回の方形区画の変遷と倉庫群との対応関係については今後の課題としたい。なお、S B 11320の北側柱筋には重複するS D 11297があり、第1段階よりも古い段階があるが、他の建物などどのように対応するか判断できない。

今回、区画の中心となる正殿相当の建物の柱穴等は確認できなかったが、四脚門を確認したことから、門からの導線を遮る建物は建っていないと推定する。中心建物は四脚門より北、S B 11110西側にある可能性を指摘するに留める。

② 掘立柱建物に併行する溝

S B 11110・11339・11340西側の溝、S D 11107・11323・11324を検討するため、調査所見を整理する。

3本の溝の共通点は以下の通りである。

- ・溝の両端はなだらかに傾斜する。
- ・溝の横断面形は、箱状もしくは底近くがわずかに広がる袋状を呈し、溝壁面は整形しない。
- ・溝埋土は黒色土であり、地山を深く掘削しているにもかかわらず、地山ブロックは含まれない。

- ・溝がしばらく開いていたもしくは滞水状況を示すような土の堆積状況は確認できない。
 - ・柱痕跡が確認できる部分の柱間は約2.5mである。
- 異なる点として、
- ・縦断面形は、北のSD 11107は、柱痕跡部のみ深くなり、柱間部は立ち上がる形状であるが、南のSD 11323・11338は、溝端から底に下がった後、一定の深さを保つ。

以上から言えることは、これらの溝は、しばらく開渠の状態もしくは滞水状況にはない。また、北の溝と南の溝では、縦断面形以外の他の要素は共通することから、縦断面形の相違は溝の用途の違いを表すのではなく、工法の違いによるものと言えるのではないか。少なくとも、柱を立てる目的のために掘られた溝であり、掘立柱建物に並行することから、どのような構造のものであったかは別として、堀としての役割を有する可能性を強く推す。

なお、SB 11320の北側柱筋が重複するSD 11297も、SD 11323・11338と溝の形状・埋土の特徴が共通する。しかしながらこの溝は、飛鳥時代遺構の第1段階であるSB 11320よりも古いことから、SD 11323・11338とは類似するもののその用途については不明と言わざるを得ない。

③ 白色粘土の存在

飛鳥・奈良時代の遺構からは特徴的な白色粘土を確認した。包含層掘削時に白色粘土が確認できた部分で土層断面ベルトを残して観察したところ、包含層である黒色土上から飛鳥・奈良時代の柱抜取穴等に入ることを確認した(第II-15図)。

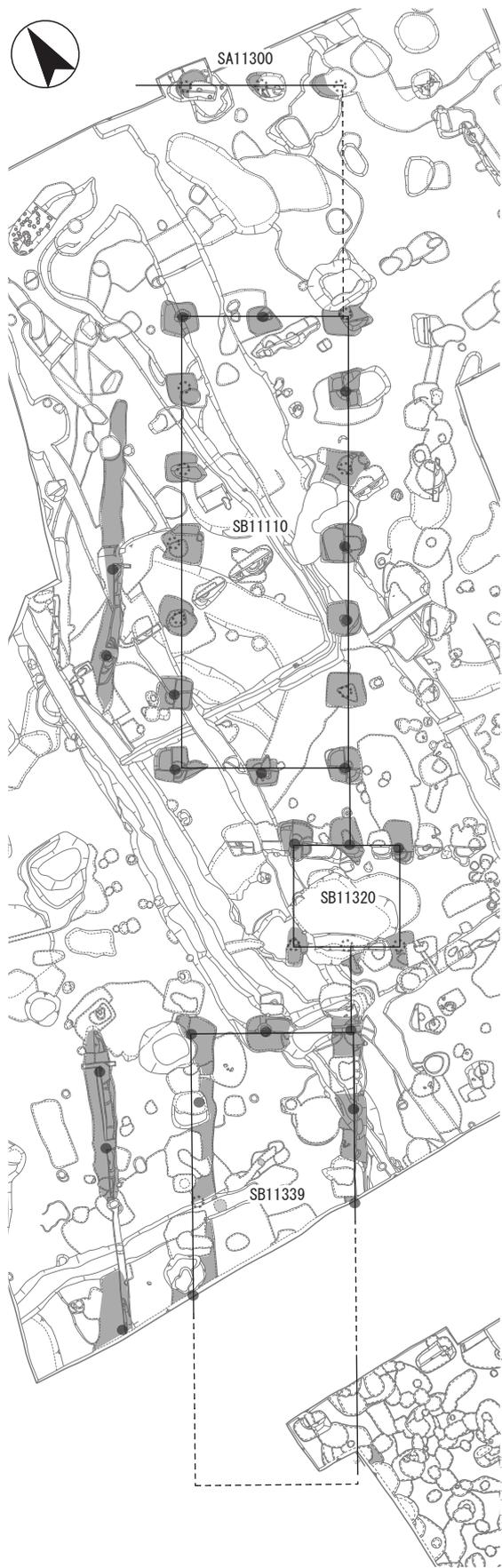
白色粘土が見られる遺構について整理をすると、白色粘土は飛鳥時代第1段階の柱抜取穴に混入するが柱掘方には入らない。そして、第2段階の柱掘方に白色粘土はブロック状に入り、柱抜取穴にも入る。奈良時代の遺構では、調査区北部で確認したSB 11342・11345では柱掘方にも柱抜取穴にも白色粘土が充填される。調査区南部の奈良時代掘立柱堀群やSB 6950では柱抜取穴にのみ入る。また、掘立柱堀に並行するSD 6950の埋土上層にも確認できる。

以上の状況から、白色粘土は飛鳥時代第1段階の遺構の廃絶段階には存在する。この白色粘土は包含層や周辺の調査区土層断面では確認できず、飛鳥時

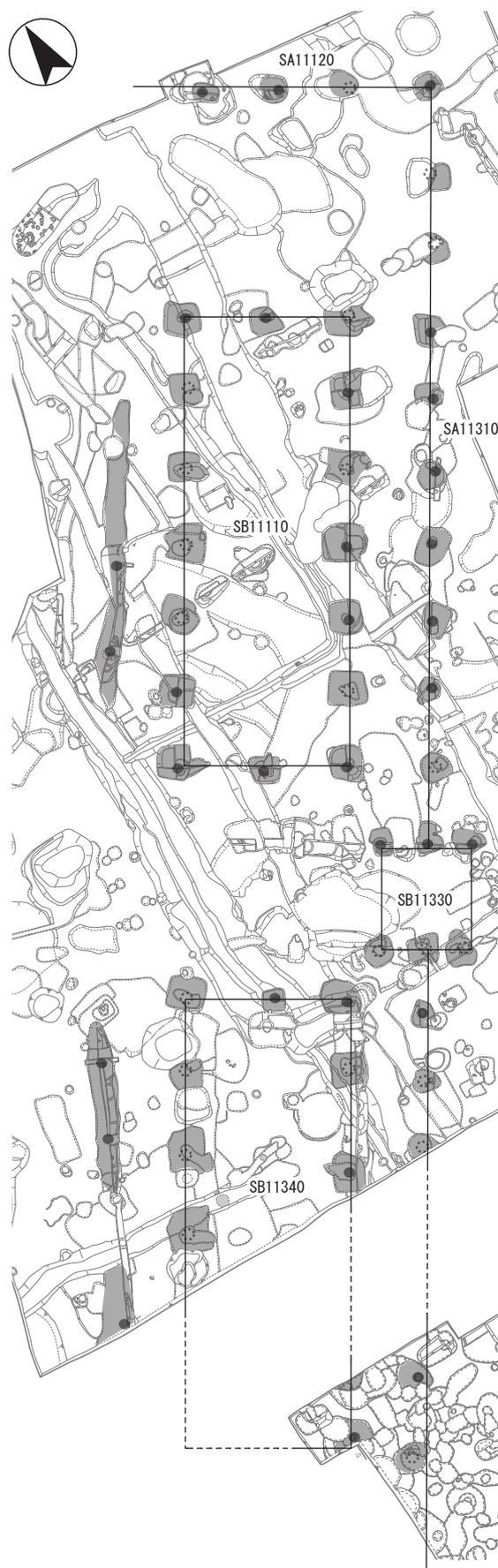
代SB 11110柱穴2抜取穴や奈良時代SB 6950柱抜取穴に見られる円礫も含め、人為的に持ち込まれた可能性があることを指摘するに留め、この性格については今後の課題としたい。

註

- (1) 辻美紀1999「古墳時代の中・後期の土師器に関する一考察」(『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室)
- (2) 石製模造品については、篠原祐一氏に齋宮跡出土品を見ていただき、ご教示いただいた。
- (3) 川部浩司2014「内面突帯の出現と展開—前期弥生土器にみる貼付突帯要素の淵源と地域性—」(弥生土器研究フォーラム2014『弥生土器研究の可能性を探る2』)
- (4) 西弘海1978「B 土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』奈良国立文化財研究所)
- (5) 齋宮跡から直線距離で約3kmに位置する松阪市天王山遺跡SK 303出土の土師器甕571が類似するが、この土坑から出土する土師器椀が飛鳥V(平城I)期、齋宮I-1期と考えられている。三重県埋蔵文化財センター2006『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』)
- (6) 伊藤裕偉1996「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」(第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会)
- (7) 山下峰司1995「4. 灰釉陶器・山茶椀」(中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社)
- (8) 天王山遺跡SH306から類似の土師器甕が出土している。
- (9) 「II 第86次調査」(『史跡齋宮跡平成2年度発掘調査概報』1991 齋宮歴史博物館)
- (10) 土師器高杯の出土が優位である点や中の坊遺跡・高ノ御前遺跡との共通性について指摘される。川部浩司2020「[論考1]考古学からみた伊勢神宮と齋宮の成立過程」(『齋宮と古代国家』展示図録 齋宮歴史博物館)



第1段階



第2段階

第Ⅱ-23図 飛鳥時代の遺構変遷図(1:200)



番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	石製品	環状石斧	e9 S211304	14.1×7.3 厚さ 2.3							009-04
2	須臾器	杯蓋	e9 S211304	復元口径 18.8 残存高 1.2	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄 2.5Y6/2	口縁部1/12	杯G蓋 飛鳥Ⅱ-Ⅲ	009-03
3	弥生土器	壺	f9 S211303 器高 25.3 底径 3.9	口径 7.5 器高 25.3 底径 3.9	外面：オサエナデ(植物圧痕有)・ハケ後ミガキ・焼成後穿孔・ヘラミガキ・接合部・ヘラミガキ・ヘラ描はこ の2ヶ所のみ)・粘土接合痕・ハケメ・ヨコナデ 内面：(板)ナデ・ナデ・オサエ・シボリ・ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR6/6	口縁部7/12 底部完形	体部内面器面荒れる	030-01
4	弥生土器	甕	f10 SK11326	残存高 1.9	外面：ナデ・ヨコナデ・刻目 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12		005-02
5	弥生土器	甕	e9 SK11326	残存高 3.5	外面：ナデ・竈描沈線・ヨコナデ・刻目 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/12		005-01
6	弥生土器	壺	e10 SK11326	残存高 1.7	外面：ミガキ・ヨコナデ・刻目 内面：ナデ・竈描沈線・刺突文 2 種内面：ナデ	密	良	灰黄褐 10YR5/2	口縁部 1/12未満		005-04
7	弥生土器	壺	e10 SK11326	残存高 1.8	外面：ナデ・竈描沈線・刺突文 2 種内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	-		005-03
8	弥生土器	壺	e9 SK11326	残存高 8.6	外面：ナデ・ハケ・竈描沈線 5条 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	-		005-06
9	弥生土器	壺	e9 SK11326	残存高 7.2	外面：沈線・貼付・ナデ・ナデ・ハケ・櫛描文 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	-		008-06
10	弥生土器	壺	e10 SK11326	残存高 6.2	外面：貼付突帯 2条・ミガキ 内面：ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	-	外面に煤付着	005-05
11	弥生土器	壺	e10 SK11326 h10 SD11297 h10 SD11103	復元脚径 32.5 残存高 11.9	外面：ミガキ(摩滅大)・ナデ・櫛描文+ミガキ 内面：ナデ・オサエ	密	良	橙 5YR6/6	肩部2/12		012-03
12	弥生土器	甕	f9 SK11332 e9 壺	復元口径 15.9 残存高 9.3	外面：タテハケ・刻目 内面：オサエ・ユビナデ・ヨコハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満	外面に煤付着 2キザミ1セット	011-05
13	弥生土器	甕	f9 SK11332	口径 15.8 残存高 14.1	外面：タテハケ・刻目・ヨコナデ 内面：ユビナデ・オサエ・ヨコハケ	密	良	灰黄褐 10YR5/2	口縁部10/12	外面に煤付着	011-04
14	石器	剥片	e9 SK11326	2.9×2.2		-	-			サヌカイトか	008-07
15	弥生土器	甕	f10 SK11329	復元口径 23.4 残存高 3.6	外面：ハケ・櫛描文・ヨコナデ・刻目 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR6/6	口縁部1/12		010-04
16	弥生土器	甕	h11 SK11341	口径 20.4 残存高 9.7	外面：ハケメ・櫛描文14・ヘラ描沈線・ハケメ・刻目・ヨ コハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部2/12		012-01
17	弥生土器	壺	h11 SK11341 No.1	口径 5.2 残存高 23.8	外面：タテハケ・ヘラミガキ・ヨコナデ・櫛描直線文 内面：ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部12/12	残存部では穿孔等なし	001-01
18	土師器	杯	is SD11336	残存高 1.6	外面：ナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部 1/12未満		007-01
19	弥生土器	壺	f12 S111321	残存高 5.1	外面：貼付・ナデ・櫛描文後ミガキ 内面：ナデ・オサエ	密	良	にぶい橙 7.5YR5/4	-		011-01
20	弥生土器	甕	e11 S111321	底径 4.9 残存高 2.9	外面：ナデ・ヘラミガキ 内面：ナデ・オサエ・ミガキ	密	良	暗灰黄 2.5Y5/2	底部完形		011-02
21	弥生土器	甕	e12 S111321	底径 7.0 残存高 4.7	外面：焼成前穿孔径1cm程度か・ナデ・オサエ・タテハケ 内面：ナデ・オサエ・ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	底部4/12		008-04
22	土師器	椀	f12 S111321	残存高 4.7	外面：オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR6/6	口縁部 1/12未満		007-07
23	土師器	高杯	e11 S111321	残存高 6.8	外面：ナデ 内面：ナデ・シボリ	密	良	橙 7.5YR6/6		脚と杯の接合部 空存	010-05
24	土師器	高杯	e11 S111321	底径 9.9 残存高 6.7	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・シボリ	密	良	橙 5YR6/6	脚底部4/12	注 編年 4	010-06
25	須臾器	壺	e12 S111321	復元頸径 9.8 残存高 6.3	外面：ナデ・櫛描波状文 内面：ナデ	密	良	黄灰 2.5Y6/1	頸部3/12		007-08
26	土師器	高杯	f8 SK11335	口径 16.1 器高 12.1 底径 8.7	外面：ヨコナデ・ナデ・オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	橙 5YR7/6	口縁部4/12	腕形高杯 注 編年 4 TK29~47併行	013-03
27	石製模造品	剣形	j 8 SK11301	5.1×1.7	片側穿孔 側面すべて研磨有 裏表とも研磨	-	-			5世紀中葉後半 緑色片岩か	035-01
28	土師器	椀	h10 SB11320 n17 掘方	残存高 5.2	外面：オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい橙 10YR6/3	口縁部 1/12未満		016-01
29	弥生土器	甕	h10 SD11297	残存高 2.2	外面：ハケ・刻目 内面：オサエ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12未満		004-01
30	弥生土器	壺	h10 SD11297	残存高 3.2	外面：ナデ・竈描沈線 内面：ナデ・貼付突帯	密	良	にぶい黄橙 10YR5/3	-	内面突帯B類	004-02
31	石器	剥片	e10 SD11297	2.2×1.8	一辺の両面に打ち欠きあり					サヌカイトか	004-03
32	須臾器	杯蓋	h10 SD11297 (SD11103底)	残存高 2.0	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰 5Y5/1	口縁部1/12未満	杯H蓋	003-06
33	土師器	杯	h10 SD11297	残存高 2.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	やや不良	橙 7.5YR6/6	口縁部1/12未満		003-04
34	土師器	杯	h10 SD11297 (SD11103底)	残存高 2.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR5/3	口縁部1/12未満		003-05
35	土製品	土馬	h10 SD11297	残存高 7.5	オサエ・ナデ	密	良	橙 5YR6/6	脚部 1本存	脚部 中実	003-07
36	縄文土器	深鉢	h8 SB11110 n15 掘方	残存高 6.5	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12未満		013-01
37	土師器	鉢	f9 SB11110 n16	残存高 3.2	外面：ナデ・オサエ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁部 1/12	TK208併行か	015-06
38	土師器	甕	f9 SB11110 n16	残存高 2.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12未満	古墳中～後期	015-05
39	土師器	甕	is SB11110 n16 柱抜取	残存高 1.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満	古墳中～後期か	015-03
40	土師器	杯	is SB11110 n16 柱抜取	残存高 2.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR6/6	口縁部 1/12未満	甕宮 1-1 古段階か	015-02
41	弥生土器	甕	e8 SD11106	残存高 1.5	外面：沈線2本・タテハケ・ヨコナデ・刻目(摩耗) 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12未満		009-05
42	弥生土器	無頭壺	e11 SD11323	残存高 4.1	外面：ナデ・オサエ・沈線・ヨコナデ 内面：ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	良	にぶい橙 5YR7/4	口縁部 1/12未満		006-08
43	土師器	高杯脚	e11 SD11323	復元底径 8.7 残存高 1.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	底部1/12	TK47~MT15併行か	006-06
44	土師器	杯か	e11 SD11323	残存高 1.5	外面：オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁部 1/12未満	飛鳥Ⅲか	006-07
45	弥生土器	壺	e11 SD11314	残存高 3.2	外面：櫛描文 内面：ナデ・オサエ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	-		006-05
46	土師器	杯	e12 SD11314	残存高 3.2	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR6/6	口縁部 1/12未満	表面摩滅大	006-04
47	陶銭	寛永通宝	e12 SD11316	径 2.3 厚さ 0.1	重さ 1.74g	-	-				012-04
48	弥生土器	甕	d 11 SD11337	残存高 1.5	外面：ヨコナデ・刻目 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12		007-02
49	土師器	杯	h10 SB11330 n110 掘方	残存高 1.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12未満	飛鳥Ⅲか 均質な胎土で焼成も堅微	016-03
50	土師器	杯	h10 SB11330 n110 掘方	残存高 2.1	外面：ヨコナデ(摩滅大) 内面：ヨコナデ(摩滅大)	密	良	橙 5YR6/6	口縁部 1/12未満	飛鳥Ⅲか	016-04
51	弥生土器	蓋	h10 SB11330 n11	残長 10.7 厚さ 1.3	外面：ナデ・オサエ・焼成前穿孔 内面：ナデ・オサエ・焼成前穿孔	密	良	灰黄褐 10YR5/2	-		015-07
52	土師器	甕	h10 SB11330 n11 柱抜取	復元口径 19.8 残存高 7.1	外面：ハケメ(摩耗)・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・オサエ・ナデ・ヨコナデ	密	良	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12		016-02
53	弥生土器	手焙形土器	h10 SB11330 n11 掘方	残存高 4.5	外面：ヘラミガキ+ヘラ描沈線・ナデ・刻目・ヘラミガキ 内面：ナデ・ミガキ・ナデ・オサエ	密	良	橙 7.5YR7/6	-		016-05
54	須臾器	器種不明	h10 SB11330 n11 柱抜取	残存高 4.2	外面：タタキ 内面：ナデ	密	良	灰 7.5Y4/1	-		016-06
55	土師器	高杯	h10 SA11310 n13 掘方	残存高 1.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	底部 1/12未満		016-07
56	土師器	甕	e12 SD11340 土坑28	抜取残存高 1.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		007-04
57	須臾器	蓋	h11 SD9690	口径 12.7 残存高 2.0	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	黄灰 2.5Y5/1	口縁部2/12		002-01
58	須臾器	把手付 無蓋高杯	h8 SB11342 n16 掘方	残存高 2.8	外面：ロクロケズリ・貼付 縦方向へラ描き 内面：厚い自然釉	密	良	釉：枯茶系975 素地：灰 5Y5/1	-		013-02
59	土師器	杯	h8 SB11342 n16 柱抜取	残存高 3.4	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁部 1/12未満	杯A 甕宮Ⅱ-1か	013-04
60	土師器	甕	is SB11342 n15 掘方	復元口径 22.5 残存高 4.4	外面：ハケメ・ヨコナデ 内面：ハケメ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	甕宮Ⅱ-2(平城Ⅱ)か	015-01
61	土師器	杯	h11 SA9094 n17 掘方	残存高 2.3	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ミガキ・ヨコナデ	密	良	橙 2.5YR6/6	口縁部 1/12未満	平城Ⅱ	017-02
62	土師器	椀	h12 SB9590 n12 柱抜取	残存高 4.5	外面：オサエ・ナデ(摩滅大)・ヨコナデ 内面：ナデ	密	良	明黄褐 10YR7/6	口縁部 1/12未満	椀C 平城Ⅲ	017-03
63	弥生土器	甕	h7 SK11111	残存高 1.5	外面：ヨコナデ・刻目 内面：ヨコナデ・ミガキ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12未満		004-06
64	土師器	皿	h12 SD11298	残存高 1.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁部1/12未満	平安～	004-04
65	土師器	杯	f9 SK11338	残存高 1.5	外面：ナデ・オサエ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁部 1/12未満	甕宮Ⅱ-3か	008-05

第Ⅱ-4表 第197次調査 遺物観察表 1

番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
66	須志器	杯	411 SD11331	残存高 3.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰10Y5/1	口縁部 1/12未満	杯G 飛鳥Ⅲ	011-03
67	弥生土器	甕	e12 SD6299	残存高 1.6	外面:沈瀬1本・ナデ・刻目(稗粒) 内面:ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12		009-06
68	土師器	甕	e12 SD6299	残存高 2.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12未満		006-01
69	土師器	甕	e12 SD6299	残存高 2.4	外面:ハケ・メ・ヨコナデ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12未満		009-07
70	土師器	小皿	e12 SD6299	口径 8.4 残存高 1.3	外面:オサエ・ナデ・粘土接合痕・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部4/12	平安末以降	006-03
71	緑釉陶器	段皿	d12 SD6299	残存高 2.0	外面:トチン痕1つ・糸切痕・貼付高台・ロクロナデ 内面:トチン痕・ロクロナデ	密	良	釉:木蘭色964 裏地:暗灰黄2.5Y5/2	-	全面施釉	006-02
72	土師器	鉢	e8 SK11322	残存高 2.0	外面:ハケ・メ・ヨコナデ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12未満	13世紀代 外面に煤付着	008-01
73	土師器	皿	e9 SK11322	復元口径 10.9 残存高 2.0	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	13世紀末~14世紀	008-02
74	陶器	椀	e9 SK11322	復元口径 12.9 残存高 3.0	外面:ロクロナデ 内面:ヨコナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部1/12	山茶碗 6形式知多	008-03
75	土師器	皿	f8 SE11325	復元口径 11.0 器高 2.3	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部2/12	南伊勢系土師器 14世紀代 煤付着	010-03
76	土師器	鉢	f8 SE11325	残存高 1.5	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12未満	南伊勢系土師器 14世紀代 煤付着	010-02
77	須志器	長頸壺	f8 SE11325	口径 4.9 残存高 9.5	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ズリ・ロクロナデ・自然釉	密	良	灰黄2.5Y6/2	頸部4/12		010-01
78	弥生土器	壺	i12 SD11101	残存高 3.2	外面:ナデ・縮描直線文 内面:ヘラミガキ	密	良	にぶい黄橙10YR5/3	-	前期	002-03
79	弥生土器	壺	i11 SD11101	残存高 4.0	外面:ナデ・縮描直線文 内面:ナデ・ヘラミガキ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	-	前期 外面に黒斑あり	002-02
80	土師器	甕	i12 SD11101	口径 8.9 残存高 1.6	外面:オサエ・ナデ・板ナデ・ヨコナデ 内面:オサエ・ナデ・板ナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部6/12	5世紀代	002-04
81	須志器	円面碗	i9 SD11101 f12 包合層	残存高 2.4	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ 方形浅かし	密	良	灰黄褐10YR5/2	底部1/12		003-03
82	土師器	焙烙	i8 SD11101	残存高 3.0	外面:ヘラケズリ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12未満	内外面に煤付着	003-02
83	磁器	湯呑碗	i9 SD11101	口径 7.9 器高 5.6 底径 2.7	外面:施釉・高台部釉掻き取り 内面:施釉	密	良	釉:藍白869 裏地:灰白5Y8/1	口縁部4/12 底部6/12	肥前	003-01
84	陶器	鉢	i8 SD11101	口径 15.9 器高 14.1 底径 15.8	外面:オサエ・ナデ・ユビナデ・オサエ後ヨコナデ・鉄釉 内面:ナデ・ユビナデ・板ナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい赤褐2.5YR5/4	口縁部4/12 底部7/12	底部焼成後穿孔 口縁部歪みあり	002-05
85	鉄製品	包丁	i9 SD11101	25.2×6.2	-	-	-	-	-	木質付着	014-01
86	土師器	鉢	e12 SD11103	残存高 2.2	外面:ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ケズリ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/12未満		004-05
87	ロクロ土師器	杯	e7 SD11305	口径 12.6 器高 3.6 底径 6.0	外面:糸切痕・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12 底部5/12	寄宮Ⅲ-3か	009-01
88	土師器	皿	e8 SD11305	復元口径 16.6 残存高 2.1	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 線刻 内面:ナデ・ヨコナデ・ミガキ	密	良	橙5YR6/8	口縁部2/12	寄宮Ⅲ-2か	004-07
89	土製品	瓶(フタ?)	f11 SD11305	4.1×2.5 厚さ 0.9	-	-	-	-	-		009-02
90	須志器	壺	e8 SD11305	復元口径 8.0 残存高 4.0	外面:ロクロナデ・高台貼付ナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰5Y5/1	底部2/12	底部外面に降灰付着 逆位 で塗装か	004-08
91	土師器	焙烙	i9 SK11299	残存高 1.3	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12		007-03
92	土師器	小皿	f11 SK11309	口径 7.2 器高 1.1	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部6/12		007-06
93	石製品	硯	f11 SK11309	長辺の残長 5.7 短辺 6.2 高さ 2.3	-	-	-	-	-		007-05
94	土師器	杯蓋	i8 n147	残存高 2.1 復元口径 14.2	外面:ヨコナデ・摩滅大 調整不明 内面:ヨコナデ・暗文等不明	密	良	明赤褐2.5YR5/8	口縁部 1/12未満	杯B蓋 寄宮1-2新~1-3 古(平城山)	015-04
95	陶器	鉢	e11 n147	口径 7.0 残存高 2.7	外面:糸切痕・貼付高台(研磨有)・ロクロナデ 内面:ロクロナデ(研磨有)	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部11/12	山茶碗 施装 12世紀末~13世紀前半	017-01
96	石製模造品	勾玉形	e8 包	4.2×2.0	刀子加工後研磨 片側穿孔	-	-	-	-	蛇紋岩か 5世紀後葉	035-03
97	弥生土器	壺頸部	e8 包	残存高 2.6	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	密	良	橙5YR6/6	-		018-04
98	弥生土器	甕	e8 包	残存高 2.2	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ・刻目 内面:ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12		018-05
99	須志器	杯	e8 包	復元口径 6.0 残存高 1.5	外面:ロクロ切り難し後ナデ・ロクロナデ 内面:一方向ナデ・ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	底部2/12	杯G 飛鳥Ⅲ(寄宮1-1)か	018-06
100	弥生土器	壺	h8 包 h7 表土 h7 包	残存高 4.0	外面:ハケ後沈瀬・ナデ後沈瀬・刻目 内面:ヨコナデ・オサエ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12未満	他2片あるが、内1片は沈瀬 の間隔が異なる別個体か	017-05
101	弥生土器	壺	h8 包	残存高 3.7	外面:ナデ+ヘラ描文+ミガキ 内面:ハケレ・ナデ	密	良	黒褐10YR3/2	-		017-07
102	土師器	小皿	h8 包 土器No.1	口径 8.7 器高 1.4 底径 3.4	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部9/12	12世紀末~13世紀代	017-04
103	ロクロ土師器	椀	h8 包	口径 6.4 残存高 2.7	外面:糸切痕・貼付高台(一部板状圧痕あり)・ロクロナデ 内面:ロクロナデ(一部煤付着)	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	底部3/12	寄宮Ⅲ-2	018-03
104	ロクロ土師器	椀	h8 包 土器No.1	口径 16.2 器高 6.1 底径 7.6	外面:糸切痕・貼付高台・ロクロナデ(煤付着) 内面:ロクロナデ(煤付着)	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部4/12	寄宮Ⅲ-2	018-02
105	土師器	鉢	h8 包	復元口径 16.6 残存高 10.0	外面:ナデ・オサエ(煤が厚く付着)・ヨコナデ 内面:ケズリ・ヨコナデ一部ユビナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部2/12	13世紀頃 口縁部~外面に煤付着	017-06
106	石製品	砥石	h8 包	8.7×8.6 厚さ 2.3	重さ175g 研磨によりへこむ 砥面 自然釉	-	-	-	-		018-01
107	磁器	染付碗	i8 包	口径 8.8 器高 4.4 底径 3.4	外面:無釉・施釉・藍色(松3本と松2本) 内面:火災文	密	良	釉:藍白869 裏地:白9/0	口縁部10/12 底部完形	肥前系 19世紀 貫入あり	019-04
108	陶器	徳利	i8 包	口径 2.4 器高 16.0 底径 7.0	外面:糸切痕・ロクロケズリ・指オサエ(へこみ2ヶ所)・ロク ロナデ・線一条 サビ釉 内面:ロクロナデ 一部サビ釉	密	良	釉:しゅろ色765 裏地:灰黄褐10YR6/2	口縁部完形 底部6/12	美濃	019-03
109	陶器	鉢	i8 包	口径 20.7 器高 8.1 底径 5.6	外面:ロクロケズリ・ケズリ出し高台・ロクロケズリ・ロク ロナデ(施釉) 内面:ナデ・ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 裏地:明黄橙10YR7/4	口縁部6/12 底部完形	貫入あり 内面にトチン痕5ヶ所 5ヶ	019-05
110	砥石	—	i8 包	残長 9.3 幅 4.2 厚さ 1.7	重さ 112g 砥面 自然釉	-	-	-	-	荒砥に近い	020-01
111	砥石	—	i8 包	残長 8.1 幅 2.6 厚さ 2.5	重さ 48.03g 砥面 自然釉 刀子等の加工痕	-	-	-	-	110より細かい	020-02
112	砥石	—	i8 包	残長 8.5 幅 3.1 厚さ 3.0	重さ 97.42g 砥面 壊打痕	-	-	-	-	111と同じくらいの目	020-03
113	砥石	—	i8 包	6.8×5.7 厚さ 1.6	重さ 52.28g 砥面やケズリ痕有 ケズリ痕多数	-	-	-	-	瓦質か	020-04
114	土製品	どろめんこ	i8 包	長さ 3.6 幅 1.5	重さ 5.10g	密	良	にぶい黄橙7.5YR6/4	ほぼ完形		019-02
115	銅銭	—	i8 包	厚さ 0.1	重さ 0.94g	-	-	-	-		019-01
116	縄文土器	深鉢	j8 包	残存高 6.2	外面:ヨコハケ・タテハケ・ヨコナデ 内面:板ナデ・ヨコハケ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部1/12		022-01
117	弥生土器	壺	j8 包	残存高 1.4	外側:キザミ凹線・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12未満		021-04
118	縄文土器	深鉢	j8 包	復元口径 26.0 残存高 8.9	外面:ヨコハケ・ナデ・ヨコナデ・指オサエ 内面:板ナデ・指オサエ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部3/12		022-04
119	土師器	甕	j8 包	残存高 2.7	外面:ナデ・オサエ・ヨコナデ 内面:ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12		021-02
120	土師器	甕	j8 包	復元口径 16.5 残存高 3.5	外面:ヨコナデ 内面:ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部1/12		021-01
121	土師器	高杯	j8 包	復元口径 14.7 残存高 4.0	外面:ハケ・メ・ヨコナデ 内面:ハケ・メ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12		022-02
122	土師器	高杯	j8 包	口径 8.6 残存高 5.9	外面:ヨコナデ・ナデ・杯部ハケレ 内面:ヨコナデ・ヘラケズリ・シボリ	密	良	橙5YR6/6	底部3/12		021-05
123	土師器	壺	j8 包	残存高 7.2	外面:タテハケ・ハケレ 内面:ヨコナデ・ナデ・ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	脚部分		021-08
124	須志器	杯蓋	j8 包	残存高 1.5	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部1/12	杯G蓋 飛鳥Ⅲ	021-07
125	須志器	杯蓋	j8 包	口径 7.1 残存高 1.9	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ・ナデ・ツマミ貼付 内面:ロクロナデ・ナデ(一方)	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部5/12	杯G蓋 飛鳥Ⅲ	021-06
126	須志器	皿	j8 包	復元口径 23.7 残存高 3.5	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	やや不良	灰白5Y8/1	口縁部3/12	皿A	021-03
127	弥生土器	広口壺	e9 包	残存高 3.2	外面:ナデ+ヘラ描沈瀬+縮描文 内面:ヘラミガキ	密	良	橙7.5YR7/6	-		023-03

第Ⅱ-5表 第197次調査 遺物観察表2

番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
128	弥生土器	甕	e9 包	残存高 4.2	外面:ヨコハケ・ヨコナデ 内面:ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12未満		022-03
129	弥生土器	蓋	e9 包	残存高 5.0	外面:ナデ・オサエ・ヨコナデ 内面:ケズリ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12		022-05
130	弥生土器	甕	e9 包	口径 15.3 残存高 14.2	外面:タテハケ・板ナデ・刻み目 内面:オサエ・ナデ・ヨコハケ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部9/12	口縁部へ外面に煤付着	024-01
131	弥生土器	壺	e9 包	底径 8.7 残存高 4.1	外面:オサエ・ヘラミガキとヘラケズリ・ヘラミガキ 内面:調整不明 器面重れる	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	底部完形		023-04
132	磨製石斧	—	e9 包	7.4×4.2 厚さ1.6	重さ 50.27g 研磨 壊打痕	—	—	—	—		023-02
133	弥生土器	壺	f9 包	残存高 5.0	外面:ヨコナデ・ヘラミガキ・刻み目 内面:ヘラミガキ・ヨコナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12未満		024-02
134	弥生土器	壺	f9 包	残存高 5.7	外面:ヘラミガキ・ヨコナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	—		024-04
135	土製品	不明	f9 包	4.8×3.3 厚さ 1.5	重さ 22.59g 砥面か 平滑に加工 ヨコナデが残る	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	—		024-03
136	砥石	—	f9 包	幅(残) 2.4 厚さ 0.9	重さ 11.17g 研磨によりへこむ 砥面欠け 研磨によりへこむ	—	—	—	—		024-05
137	磁器	碗	f9 包	口径 11.1 器高 6.5 底径 6.1	全面施釉 柄は青色	密	良	釉:藍白869 素地:灰白5Y8/1	口縁部9/12 底部10/12	肥前系 広東碗 桃瀬痕 高台部に焼痕による印	023-01
138	縄文土器	浅鉢	f9 包	残存高 3.3	外面:一部ミガキ・ナデ・竹管刺突文 内面:オサエ・ナデ	密	良	にぶい赤褐5YR5/4	口縁部 1/12未満	縄文中期か	025-06
139	弥生土器	壺	f9 包	残存高 3.4	外面:ミガキ・ヘラ描文・縄文? 内面:ナデ・オサエ	密	良	にぶい橙7.5YR5/3	—		027-03
140	弥生土器	壺	f9 包	残存高 4.5	外面:ミガキ・ヘラ描沈線 内面:ヘラミガキ	密	良	橙5YR6/6	—		025-04
141	弥生土器	壺	f9 包	残存高 3.0	外面:ミガキ・ヘラ描沈線・貼付 内面:ヘラミガキ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	—		025-03
142	弥生土器	小型鉢	f9 包	残存高 3.5	外面:ナデ・縄描文・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12未満		027-02
143	須恵器	器台か	f9 包	残存高 5.0	外面:ケズリ後ミガキ・ヨコナデ 内面:ナデ	密	良	灰10Y4/1	—		025-01
144	土師器	杯	f9 包	復元口径 13.5 器高 3.0	外面:ケズリ後ミガキ・ヨコナデ 内面:ワセミガキ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	斎宮 I-3か	025-02
145	土師器	壺	f9 包	残存高 5.5	外面:ハケ後ミガキ・ヨコナデ 内面:ケズリ後ヘラミガキ・ヨコナデ	密	良	橙2.5YR6/8	口縁部 1/12未満	平城 II か	025-05
146	磁器	紅皿	f9 包	口径 5.0 器高 2.5 底径 2.1	外面:施釉・無釉・施釉 (一部無釉) 内面:施釉	密	良	釉:藍白869 素地:白9/0	口縁部5/12		028-02
147	砥石	—	f9 包	残長 6.7 幅 3.8 厚さ 2.8	重さ86.35g 砥面刃痕?顕著 一部やや研磨している	—	—	—	—		027-01
148	土製品	南線 二朱銀	f9 包	長さ 2.5 幅 1.4 厚さ 0.3	重さ1.91g	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完形	「銀座常是」	028-01
149	石製品	硯	f9 包	15.2×5.9 厚さ 1.8	重さ 196g	—	—	—	—		027-04
150	須恵器	杯蓋	g9 包	復元口径 9.6 残存高 1.9	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ・ツマミ・隆灰 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部 1/12未満	飛鳥 III か 正位で案詰	028-05
151	須恵器	杯蓋	g9 包	残存高 0.8	外面:ロクロケズリ・ツマミ貼付 内面:ロクロナデ・二方向ナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	—	飛鳥 III か	028-03
152	陶器	碗	g9 包	底径 7.7 残存高 2.7	外面:糸切痕・貼付高台・ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ・研磨	密	良	釉:青白綠989 素地:灰黄2.5Y7/2	底部3/12	山茶碗 瀬美 5段階 12世紀末 内面に墨痕	028-04
153	弥生土器	壺	i9 包	残存高 4.8	外面:ハグレ・タテハケのちナデ・縄描文・ナデ・縄描文 内面:オサエナデ・粘土糺合痕	密	良	橙7.5YR7/6	—		028-06
154	弥生土器	手焙形土器	i9 包	残存高 2.6	外面:縄描文・ナデ・刻み目 内面:ワレ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	—		028-08
155	弥生土器	鉢	i9 包	残存高 3.2	外面:縄描文 内面:ユビオサエ	密	良	浅黄橙7.5Y8/6	—	小型鉢か	026-02
156	弥生土器	壺	i9 包	残存高 3.5	外面:縄描文・赤彩・キザミ 内面:ナデ・オサエ	密	良	明赤褐2.5YR5/6	—	弥生末へ古墳前 瓢箪か	026-01
157	土師器	甕	i9 包	復元口径 21.6 残存高 5.1	外面:タテハケ・ヨコナデ 内面:板ナデ・ヨコハケ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12		028-07
158	弥生土器	小型壺	j9 包	残存高 3.3	外面:ナデ・縄描文 内面:ナデ・縄描文	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12未満		022-06
159	土師器	碗	j9 包	残存高 3.2	外面:ナデ・オサエ・ユビオサエ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	—	TK208か	026-04
160	須恵器	杯蓋	j9 包	口径 11.2 残存高 1.4	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ・ロクロナデ後多方向ナデ	密	良	灰7.5Y6/1	口縁部3/12	飛鳥 III	026-03
161	須恵器	杯	j9 包	肩部径 9.3 器高 3.8	外面:切り離し後ナデ・オサエ・ケズリ・ロクロナデ 内面:ナデ・隆灰・ナデ・沈線・ミガキか?	密	良	灰10Y5/1	口縁部 1/12未満		026-05
162	弥生土器	壺	k10 包	残存高 4.9	外面:ナデ・沈線	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	—		029-01
163	弥生土器	甕	k10 包	口径 29.0 残存高 2.8	外面:ハケ・縄描沈線・ナデ・キザミ 内面:ナデ・ハケ後ミガキ	密	良	橙5YR6/6	口縁部2/12		026-06
164	石製品	台石か?	k10 包	残長 12.1 厚さ 3.9	重さ784g 自然面であるがやや平滑 壊打痕	—	—	—	—		026-07
165	弥生土器	壺	f10 包	残存高 1.9 口径 0.3	外面:ミガキ・キザミ・ナデ・沈線 内面:ナデ	密	良	明赤褐2.5Y5/6	—		029-06
166	弥生土器	細頸壺?	f10 包	残存高 4.1	外面:クシ 内面:ミガキ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	—		029-07
167	弥生土器	壺	f10 包	残存高 2.7	外面:クシ 内面:ナデ・オサエ	密	良	浅黄橙10YR8/4	不明		031-02
168	弥生土器	壺	f10 包	底径 6.4 残存高 3.6	外面:ナデ・ハケ・ミガキ 内面:ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	底部12/12		029-04
169	須恵器	杯蓋	f10 包	残存高 1.9	外面:ヨコナデ・ロクロケズリ 内面:ヨコナデ	密	良	灰オリーブ5Y6/2	—	斎宮 I-2か	029-03
170	須恵器	杯	f10 包	残存高 3.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	—	杯G 飛鳥 III 鑑証め正位 内面自然釉	029-02
171	土師器	高杯	f10 包	底径 8.6 残存高 4.1	外面:ヨコナデ・ミガキ 内面:ナデ・ナデ・オサエ	密	良	橙5YR6/8	—	飛鳥 II	029-05
172	土製品	輪羽口	f10 包	残存高 4.3	外面:クシ 内面:ナデ	密	良	黄橙10YR8/6	—		029-08
173	須恵器	杯蓋	g10 包	口径 11.2 残存高 2.0	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰7.5Y5/1	口縁部1/12	飛鳥 III	031-03
174	須恵器	杯	g10 包	残存高 3.6	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	不明	杯G	032-02
175	陶器	碗	g10 包	底径 8.4 残存高 3.3	外面:ロクロナデ・貼付高台(摩耗)・ロクロナデ 内面:磨耗・ロクロナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	底部12/12	12世紀後半(4型式) 瀬美産	031-01
176	弥生土器	壺	h10 表土	残存高 9.9	外面:凹線文八条後ミガキ 内面:ハケ後ミガキ・ミガキ後ハケリ?	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	不明		032-01
177	石製模造品	勾玉形	h10 包	2.4×1.2	側面刀子で加工・穿孔による刻線有 柱面磨光	—	—	—	—	網雲母岩・滑石片岩・シル ト岩か	035-02
178	土師器	杯	h10 包	残存高 3.8	外面:ハグレ・ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR6/6	不明	斎宮 I-2 平城 II	032-03
179	土師器	高杯	i10 包	推定杯頸底径 11.8 残存高 2.1	外面:ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ	密	良	明赤褐5YR5/8	不明		032-05
180	須恵器	杯蓋	i10 包	口径 18.0 器高 2.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部2/12		032-04
181	須恵器	杯蓋	h11 包	推定口径 14.5 残存高 0.8	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰7.5Y5.1	口縁部1/12	平城 I	033-01
182	土師器	皿	i11 包	口径 13.2 器高 1.3	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:オサエ・ナデ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部3/12	斎宮 II-3	033-02
183	弥生土器	壺	e12 包	残存高 3.8	外面:ヘラ 内面:ミガキ・ナデ・オサエ	密	良	橙7.5YR6/6	不明		033-04
184	須恵器	杯	e12 包	口径 9.3 器高 3.1	外面:切り離し後ロクロケズリ後一方方向ナデ・ロクロナデ 内面:一方方向ナデ・ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	全体の1/2	杯G 飛鳥 III~IV ロクロの回転は反時計回り	033-03
185	弥生土器	甕	i10 表土	残存高 11.6	外面:ハケ(煤付着)・ヨコナデ 内面:ナデ・ハケ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	不明	煤付着	034-1
186	須恵器	杯蓋	h12 表土	残存高 2.5	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰7.5Y6/1	不明	飛鳥 III	034-4
187	緑釉陶器	皿	i12 表土	残存高 1.85	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:山鳩色822 素地:褐灰10YR6/1	不明		034-5
188	緑釉陶器	皿	i12 表土	残存高 1.6	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:外面 利休白茶812 内面 ねこやなぎ色825 素地:灰白5Y7/2	不明	9世紀中	034-2
189	磁器	紅皿	f9 表土	口径 4.6 底径 1.2 器高 1.3	外面:型作り後施釉 内面:型作り後施釉	密	良	釉:灰白946 素地:淡黄2.5Y8/3	完形		034-3
190	石器	排土	タテ 包	タテ 2.7 最大幅 1.5	重さ 5.3g 主要剥離面	—	—	—	—	サヌカイトか 全体的に風化著しい	034-6
191	弥生土器	壺	e10 カクラン	残存高 2.3	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12		012-02

第Ⅱ-6表 第197次調査 遺物観察表3



調査区遠景（北東上空から）



調査区全景（上空から）

写真図版 2



SA11310 (北東から)



SB11110 柱穴2柱抜取穴検出状況 (南西から)



SD11107 (南西から)



SD11323 (北東から)



SD11107 柱穴2断面 (東から)



SD11323 断面 (南から)

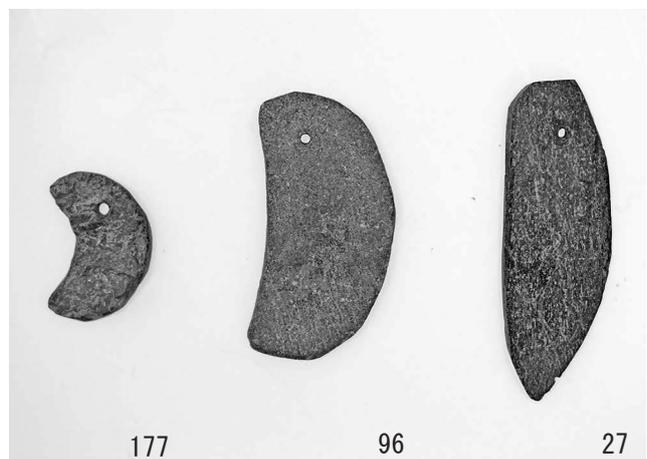


SD11297・SB11320 柱穴断面 (南西から)



調査区南東部 奈良時代掘立柱塼 (東から)

写真図版 4



第 197 次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと れいわがんねんどはっくつちようさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 令和元年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山中由紀子							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2021年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "			
さいくうあと 斎宮跡	たきぐんめいわちよう 多気郡明和町 さいくう たけがわ 斎宮・竹川	24442	210	34° 31' 55" ～ 34° 32' 30"	136° 36' 16" ～ 136° 37' 37"	20190902 ～ 20200323	425.8m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
斎宮跡 第197次	官衙	弥生・古墳・ 飛鳥・奈良・ 鎌倉・江戸		方形周溝墓・ 竪穴建物・ 掘立柱建物・ 掘立柱塀・ 門・溝・土坑		弥生土器・土師器・須恵 器・陶磁器・土製品・石 製品・金属製品・瓦		飛鳥時代の方形 定区画北東部
要約	飛鳥時代の斎宮中枢域での発掘調査において、掘立柱塀で構成される方形区画と区画施設に付随する門を確認した。方形区画を構成する掘立柱塀に付随する門は1回の建替え、南側掘立柱建物は1回の建替えを認めるが、こうした空間整備の変遷は平成30年度に第195次調査で確認した倉院の変遷と連動し、区画の構造を考える上で重要な成果を提示したといえる。							

史跡 齋宮跡

令和元年度

発掘調査概報

2021年3月26日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 株式会社ミフジ印刷
